

---

# 金色の陽と透き通った青空

淡雪ぼたん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

金色の陽と透き通った青空

### 【Nコード】

N2293V

### 【作者名】

淡雪ぼたん

### 【あらすじ】

軽井沢の深い森の中に佇む中世ヨーロッパ風の小さなガーデンハウス……。ここは、若い女店主1人で切り盛りする、焼き菓子の店だった……。その女性には悲しい過去があった。愛の無い政略結婚、愛の無い結婚生活、殆ど顔を合わせた事の無い夫、一方的に突きつけられた離婚届け……。

自分にはなにも無かった……。死のうと思った……。その翌朝、窓から差し込む金色の温かい光……。窓を開けて見上げたら、どこまでも透き通る青い空が目に見え込んできた。

あまりにも美しくて、心が洗われて、生きようと思った。．．。  
そして何もかも捨てて、この場所にお店を開いた。．．。  
そんな時に元夫であるあの男が自分の前に姿を現した。．．。

## 第1話 森の中の小さなガーデンハウス

軽井沢の緑の大変美しい、静かな森の中……。

金持ちの別荘地としても有名な所で、中には転々と大きな屋敷が佇んでいたが、その中にポツンと、絵本の中から抜け出たような小っちゃな中世ヨーロッパの片田舎風のガーデンハウスが立っていた。

禿げてレンガの下地が見えてるしっくい壁に、まあるい葉のまめつたがはっている。

こけら葺き（木を何枚も重ねて葺いたもの）の屋根に、黒いブリキの煙突……。そこからゆらりゆらりと白い煙が上がっている。

手作りガラスの可愛いガラス窓は、下から持ち上げて木で支えて上げる形で、白い手作り風のカフェカーテンがフワリフワリと優しい風に踊っている。

その窓には飾り鎧戸がついていてその下にはアイアンの花置き台がついていて、鉢植えの素朴な花が揺れている。

屋根のすぐ下の丸い嵌め殺しの窓は、カラフルなガラスのステンドグラスになっている。

木の枝風の持ち手に、重厚なロートアイアンの金具の付いたブルーの板壁風ドアを開けると広さは6畳ぐらいの小さなスペースで、床はアンティークな焦げ茶色のフローリング、白のしっくい壁に、壁面上部には廃材風の素朴な木の飾り棚がついていて、お手製のカーントリー人形が並んでる。その下には手作りリースや、アンティークな額に入ったモノクロの写真も飾られている。

出入り口ドアの脇には、素朴な木のスツールが置かれていて、その上にはブリキの水差しに生けた、朝摘んだ野の花が飾られていた。

中に入ってまず目に飛び込んでくるのは、大きなガラスショーケース

ス．．．．。

そして、部屋中に広がる甘い焼き菓子の香り．．．。  
ガラスショーケースの中には長方形の籐の籠に、色々な種類の焼き菓子が並んでいて、陳列されていた。

そう．．．ここは焼き菓子のお店で、若い女店主1人で、お菓子を焼いて販売している、知る人ぞ知る焼き菓子の美味しいお店だ．．．。

そのお店の名前は、『森の中の小さな焼き菓子のお店 アンジュ』。

クッキー、パウンドケーキ、フィナンシェ、マドレーヌ、マフィン、シフォンケーキ、ロールケーキ．．．。

お店に並ぶ焼き菓子は、昔ながらの素朴で、甘さは少し控え目で、どこか懐かしく優しい味．．．。

一度食べたなら、また食べたくなるそんなお菓子達だ．．．。

一人で切り盛りしてるから、焼き菓子の数もそれ程大量には作れず、普段は10時にオープンして、お昼前後で完売してしまう。お天気の悪いお客さんの少ない日でも、大抵午後2時には完売してしまう。入れてくれる袋もとても可愛らしい．．．。

地味な筋入りの茶色いクラフト紙の袋に、手作りの消しゴムハンコで押した、可愛い絵柄付き。ちよっとレトロな懐かしい雰囲気。袋．．．。

ギフトセットの焼き菓子詰め合わせは、一ヶ月前に予約しておけば何とか手に入れる事が出来る．．．。

味を落としたく無いので、一日に焼く数量も決めている。

ラッピングもとても可愛く、ギフトセットはとても喜ばれて大好評！！

オススメは、店長お任せ焼き菓子セットと、ひとつひとつデコレーションした食べるのが勿体ないぐらい可愛いクッキーセット、手作りジャムセット、店長のセレクトした茶葉もセットになった午

後のお茶セットも人気商品・・・。

口の中でほんわりととろける、ほろほろクッキーセットも好評だ。

オープンしたての頃は、ネット販売もしていたが、今は、お店に来るお客様に販売の分で精一杯で、お店のHPは不定期にUPされる店主ブログと商品情報のみ公開中。

このブログがまた大人気で、ランキング上位にも何度も登場する程だ。

ここの若い女店主は25歳・・・。

とても綺麗な女性だった・・・ 何処か育ちの良さを感じさせられる所作・・・ 色白で大きな澄んだ瞳に長いまつ毛・・・。

長いサラサラの髪を後ろでシュシュで一つにまとめて、お手製っぽいナチュラルなリネンやコットンの服に、同じくお手製っぽい三角巾と可愛いエプロンドレスを付けて・・・ 物腰がソフトでとても優しそうな雰囲気の女性。

お店の名前は、その女性の名前が『杏樹』だかららしい・・・。

こんな素敵なお店の素敵な女店主さんには、悲しい過去があった・・・。

左手首にある切り傷の跡・・・。

誰もお菓子作りの時に誤って切ってしまった傷だと思ってるし、女店主もそのように言っていたが・・・。

本当は悲しい過去の傷跡だった・・・。

(第2話に続く)



## 第2話 愚かな夫・失って初めて気付くこと（前書き）

今回は血の要素の含む重苦しいシーンがございます。

こう言った表現が苦手な方は、読むのをおやめになるか、十分ご注意の上でお読みになって下さい。



## 第2話 愚かな夫・失って初めて気付くこと

海藤リゾート・・・自然環境を保全、保護しながらホテル事業や別荘開発などのリゾート事業を幅広く運営、急成長を遂げた、リゾート事業の大手企業・・・。

その娘が杏樹だった・・・。

その会長である、海藤隆也かいとう たかやから娘、杏樹との縁談を持ちかけられ、大手総合商社の総帥、玖鳳翔馬くほう しょうまの命で、孫であり玖鳳グループの社長でもある、玖鳳智弘くほう ともひろは杏樹と結婚した。  
智弘26歳、杏樹21歳だった・・・。

――――愛のない結婚だった・・・。

生まれながらにして玖鳳グループを背負っていかなくてはならない運命・・・。

父親を早くに亡くし、玖鳳家の血筋を受け継ぐ物は、智弘ただ1人・・・。

幼い頃より帝王学を学び、厳しく育てられて、結婚も勿論総帥の決めた相手と結婚するのが当たり前なのだったと思った。

愛などと言う物は知らなかった・・・。大企業を率いる者にとって、そんなものは必要なかった。

妻は添え物・・・それなりの家出身で、学歴は高すぎても好ましくない・・・下手をしたら自分に刃向かったり、事業に口を挟んだり、会社にとってマイナスになる事態になる時もある。それなりの学歴で、それなりの教養があり、大人しく従順で、自分の子孫を残す役割を果たせばいい事だ。自分の母親の様に・・・。

母の事は微かに覚えているだけだ。

父が事故で亡くなってから、総帥の命で玖鳳家を追い出された。

元々玖鳳家にはうんざりしていたようだった・・・文句も言わず、

すぐに出ていった・・・。俺が3歳の頃だった・・・。

その後、風の便りで再婚して幸せに暮らしていると聞いた事があった。

相手の男性は、あまり特徴もない、大して財産もない一般の男性だったようだ。

今は行方も分らず、捜そうとも思わないし、何の感情も持っていない・・・。

杏樹は総帥が見込んだだけあって、大人しい従順な女性だった・・・。何の特徴もないつまらない女・・・。

ただ、子孫を残す為に時々屋敷に戻って来て、一緒に一晩明かす・・・。

あとは、自分の隠れ家的なマンションに戻って、気ままな一人暮らしを楽しんでいた。

隠居して、別宅に住んでいる総帥はこの事は知らない・・・。敷かれたレールの上を淡々と進んでいかなくてはいけない自分の運命にある日虚しさを感じ、密かに隠れ家を手に入れ普段はそこで暮らしていた・・・。

俺は思っていた・・・。総帥が玖鳳グループから完全退陣したら、俺のやりたいようにさせてもらおうと・・・。

その日を・・・。その日だけを心の支えに待ち望んでいた。

―――ある日、とんでもない事件が巻き起こった・・・。

杏樹の父親が反乱を起した・・・。ただのリゾート開発企業の子トラの分際で、うちの社にM & a m p ; A (企業買収)を仕掛けてきた・・・。

事前にこの兆候は、わが社の株の動きで察知していた・・・。

予め用意していた、海藤グループのリゾート開発誘致不正買収の情報を入手、その情報をマスコミに流し、それが火だねとなって、海藤隆也と杏樹の兄であり社長である海藤雅也は逮捕、失脚・・・。

弱小化した海藤グループを手中に収める事に成功した。

今回の件で怒り狂った総帥は、杏樹を屋敷から追い出し、小さなマンションに住まわせた。

そして総帥の支持で秘書が離婚届を用意し、そのマンションを訪ね、杏樹に署名捺印させた。

これでジ・エンド・・・。

だが・・・おれは、その離婚届を秘書から奪い取り、シュレッダーにかけ処分した。

結婚も離婚も総帥の一存で決められる事に、うんざりしていた・・・。

その反抗心から、離婚届を廃棄した。

そしてこっそりと杏樹の住まわされているマンションを訪ねた。

インターホンを何度も押したが反応はなく、何気なくドアノブに手をかけたら、鍵はかかってなく楽々部屋に入る事が出来た。

小さなLDKの何もない質素な部屋だった・・・。そして杏樹はいなかった・・・。

寝室に入ってベッドを見て驚愕した・・・。

慌ててシーツを引きはがして処分した感じで、ベッドマットレスにはカバーもなく、剥き出しの状態だった。

そこに、かなり出血したのか、マットレスに血が染みて茶色く変色していた。

ごみ箱をあさったら、口をきつく締めたビニール袋から、真っ赤に染まったシーツや血で染まったパジャマやナイフも出てきた・・・。

――死のうとしたのか？

これを見て初めて心が痛くなり、苦しく思った……。

その時に、自分には心がある事を感じた……。

杏樹はどこにいるのか？ 大丈夫なのか？

あらゆる機関を使って、杏樹の行方を調べた。

数日して、手首を深く切ったが命に別状はなく、数針縫う治療を受けている事が分った。

その病院で、心療内科を受診するように勧められたが、行かなかったらしい……。

その後の行方は全くつかめなかった。

（第3話に続く）

## 第2話 愚かな夫・失って初めて気付くこと（後書き）

この場面だけは重苦しい雰囲気になります。

重いシーンはこの部分のみと、少し後の方に出て来る、主人公・杏樹の回想シーンのみの予定です。

### 第3話 それから3年

杏樹の行方は全くつかめなかった．．．。

総帥は俺が離婚届を破棄した事に変激怒したが、大人しく従順だった孫が、初めて自分に逆らった事にかなりショックも受けた様子だった．．．。

「杏樹の事はお前に任す」と一言言っただけでその後は不問に終わった．．．。

こうなる前に、もつとどうにか出来無かったのかと自分を責めた．．．。

総帥にも非があるが、己自身も同じように非があったのだと今頃になって気がついた。

愛情なのか執着なのか．．．彼女に対するただの興味なのか．．．これ以上自殺騒ぎを起されたくないと言う保身の為なのか．．．自分でも良く分らないが、気になって仕方がなかった．．．。

3年が経過した頃だった．．．。

秘書が、ノートパソコンを抱えて、血相を変えて社長室に飛び込んできた。

「社長．．．これを見て下さい！！！」

秘書の持ってきたノートパソコンを見て驚いた．．．。

それは軽井沢の高級リゾート別荘地の森の片隅にある、小さな焼き菓子店のHPだった．．．。

トップページは森に囲まれた中に佇む、絵本の中から抜け出たような小さなガーデンハウスのような店舗写真。

店内の写真や、焼き菓子類の商品の紹介……。店主紹介欄には杏樹の顔写真と、プロフィールが書かれていた。

名前は旧姓の『海藤杏樹』になっていた……。

今でも君は、玖鳳杏樹なのに……。”海藤杏樹”だって？

幸せそうに笑ってる写真だった……。

この写真で初めて彼女の笑ってる顔を見た。

お日様の様に温かな笑顔……。彼女の笑顔を見て気持ちがモヤモヤした……。俺にはこんな笑顔を見せてくれなかったじゃないか！！その笑顔が可愛くて、優しくて……。何故だか切なく悲しい気持ちになった……。

店主ブログには、軽井沢でのほのぼのした生活の様子などが書込まれていた。

定休日は毎週水曜日……。月2回、その水曜日に、手作りの服や小物などを、店舗横の小さな庭でヤードセールを開くらしい……。クッキーや保存の利くパウンドケーキのネット販売をしてる事を知り、洋酒漬けドライフルーツのパウンドケーキとクッキー詰め合わせを、偽名で注文してみた。

注文した商品は、1週間後に杏樹の知らない俺の隠れ家に使用しているマンションに届いた……。

あのガーデンハウスのような店舗の写真のついたポストカードと、心のこもった手書きの礼状カードが入っていた。

彼女の書いた字を初めて目にしたような気がした……。

少し丸みを帯び、女の子らしい柔らかな雰囲気も漂ってるが、流れるような美しい綺麗な字だった……。

クッキーは一つ一つ可愛い絵柄のついたクリスタルパックに包装されていて、ピンクのギフトボックスに入っていた。

子供や若い女の子が喜びそうな、綺麗にデコレーションされた色々な形のクッキー……。

ひとくち食べて見たら、今まで食べたどのクッキーよりも美味しい

と思った・・・。

高級洋菓子店のようなのは一味違う、お母さんの手作りのような・それでいてひとくち食べたら忘れられない味・・・。

甘さは少し控え目だけれど、美味しい・・・。体の中に優しさが広がっていくような味と言うのだろうか・・・。

厳選した材料で、丁寧な心を込めて一生懸命作ったのが伝わってくる・・・。

パウンドケーキも凄く美味しかった・・・。

どぎつい甘さじゃなくて、洋酒が主張しすぎずに程よく利いていて・・・ふんわりしっとりしてこれもまた忘れられない味・・・。

杏樹にこんな才能があったなんて!!

素晴らしい人だと思った・・・そして・・・俺はなんて大ばか野郎なんだと思った・・・。

HPの店主ブログにはコメントも入れられるようになっていた。

今日のブログは、庭に植えてあるハーブで作るお茶のお話し・・・。

朝摘んだレモングラス、レモンバーム、スペアミントをティーポットに入れて、熱い湯を注いで作るフレッシュハーブティーの話が書かれていた。

画像は庭にあるガーデンテーブルに、耐熱ガラスのティーポットに入ったフレッシュハーブとガラスの耐熱グラスのティーカップに、小皿に載せたハーブクッキーがUPされていた。

俺は、”フール”というハンネで、『自宅の庭で採取したハーブティー、いいですね。どんな味のするお茶なのか？とても気になります。』と記入した。

”フール”の意味は、英語で”fool”ばか者という意味だ・・・。俺にピッタリなネームだと思った。

数日後、彼女から返事が書かれていた。



『フル様 あの手フレッシュハーブティーの味ですが・・・。サッパリと爽かなお茶です。氷を入れてアイスにしても美味しいですよ！宜しかったらお試しになって下さいネ』

杏樹からの返事が凄く嬉しかった・・・。

遠い手の届かない所に行ってしまった杏樹と、ほんの一瞬だけれど、また繋がる事が出来た・・・。

それがとても嬉しかった・・・。

その翌日、ドライでしか入手できなかったが、早速あのハーブを購入して、ティーポットに入れて湯を注いで飲んでみた・・・。

「うーん・・・」こんな味なのかな？ちよっと違う感じもする・・・。ドライではあの写真の様に瑞々しく青々としてないし・・・。

慣れない味なのか？それ程美味しく感じなかった・・・。だが、彼女に少し近づけた気がした。

――杏樹・・・無性に会いたい・・・。

会いに行っても拒絶される事は分っているけど、会いたくてたまらなかった。

(第4話に続く)

## 第4話 メル友

杏樹に会いたいが、あんな酷い仕打ちをして、会えるはずがないし、会う資格もない。

だが……。何か繋がりが欲しかった……。

HPの彼女のプロフィールの最後には、お店のメールアドレスが書込まれていた。

焼き菓子注文の為や、店舗の問い合わせなどの為に載せているのだと思うが、一か八か他愛ない内容だがメールを書いてみた。

\*\*\*

杏樹様

いつもお店のブログを楽しみに拝見させていただいております。

先日焼き菓子を注文し、届いたその日に頂きましたが、とても美味しくて感動しました。

すぐにでもまた注文したい気持ちです。

ところで、あのブログのハーブティーが気になり、無性に飲んでみたくなって、捜しました所、ドライハーブを入手することが出来、早速入れて飲んでみましたが、苦くて薬っぽい味で、想像したものとは違ってました。色もちょっと違ってる感じでした……。

俺にはハーブティーのような、お洒落な飲み物は向いてないのかなとちよっとガツクリしました。

ハーブティー初心者にはどんな物がオススメなのでしょう？

いきなりこんなメール送ってしまい、失礼かなとも思ったのですが、  
．．とても気になってしまつてついメールを書いてしまいました。  
お忙しそうですし、ご迷惑なら返事を書かずに、放置して構いませ  
んので．．．。

ほんとうにすみません。  
それでは失礼致します。

フル様より

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

返事が来るのは半々の確率いや．．．それ以下かなとあまり自信が  
無かったが、それから数日して返事が来た。  
キチンとした律義な人なんだなと感じた。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

フル様

メール、どうもありがとうございます。

それから焼き菓子をお買い上げ下さり、まことにありがとうございます。  
ます。

美味しいと言っていただけで、とても嬉しく感動しております。  
お客様の美味しいの一言が私の励ましと、頑張る力の源です。  
これからも一生懸命頑張っていきたいと思っております。

ハーブティーの質問ですが、フレッシュハーブとドライハーブでは、  
味や抽出したお茶の色合いが違ふと思われまふ。

また、入れる分量によっても色や味が違ってきます。

それ以外に、あまりハーブティーに馴染まれてない方ですと、美味しく感じなかったりもされるかもしれません。

好みの味がございますので、オススメというのも難しいのですが・・・。

ハーブティーには属しませんが、紅茶にハーブをブレンドしたり、香りを添加した物も売られております。

アールグレイティーは茶葉に”ベルガモット”の柑橘系の香りをつけたものです。

他には、T社のレディ・・・ティーには、アールグレイをベースに、オレンジピール、レモンピール、そして、ブルーの矢車菊のドライの花びらがブレンドされてます。

ほんの少し、ハーブの雰囲気を感じられるかしらと思ってます。そちらをお試しになってみてはいかがでしょう？

他には、ハーブティーに、はちみつや甜菜糖シロップなど甘味料を入れて飲むと飲み易くなるかもしれません。

もしハーブティーに色々興味がございましたら、少量ずつ色々な種類をお試しになってみて、好みの味を捜すのも手かもしれません。ティーバッグになっている物が便利かと思います。

余談ですが・・・。

面白いハーブティーがございます。

マロウティーにレモン汁を1滴たらすと、不思議なんですよ！

答えは・・・。お試しになって見て下さい！！（＾Ｏ＾）

長文失礼致しました。

今後ともどうぞよろしくお願い致します。

海藤 杏樹

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

顔マークがなんだか凄く可愛らしくて嬉しかった．．．。  
早速マロウティーのティーバッグを買ってきて試してみた。

カップにマロウティーのティーバッグを入れて湯を注ぐと、濃い鮮やかな紫色になった．．．。

「凄い色だな．．．」

自然の色とは思えない鮮やかな紫色に驚いた．．．。  
そして、ドキドキしながらレモン汁を一滴たらしてみた。

「うわぁ．．．」

一瞬にして、鮮やかなピンク色に変化した．．．。

嬉しくて、嬉しくて．．．俺はすぐ返事を書いた。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

杏樹様

マロウティーの問題ですが、答えが分って、嬉しくて焦ってメール書いてます。

答えは『ピンク色』ですね。

鮮やかな美しい色に、とても驚いています。

楽しい問題、ありがとうございました。／（＾Ｏ＾）／

フルより

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

・ ・ ・ この事がきっかけとなり、俺達は度々メール交換するようになった。

（第5話に続く）

## 第5話 杏樹の謎

杏樹の店は店舗兼住居になっており、店舗スペースは、8畳大の店舗スペースとその右隣が、8畳大の焼き菓子工房。

工房から店舗奥のプライベートスペースに出入り出来る。

プライベートスペースの間取りは、8畳大のダイニングキッチンに、6畳大の寝室兼書斎、トイレ、洗面所、バスルーム、3畳大の作業スペース、ダイニングキッチン端には急傾斜のはしご階段がかかっており、12畳大の屋根裏部屋に行ける。

屋根裏部屋は場所的には店舗と焼き菓子工房の上の部分にあたり、天井は屋根の形に合わせた急傾斜の形をして、こげ茶色の塗料で塗った梁が、いい雰囲気にとろな味わいを出している。壁面は真っ白な塗り壁で、床にはオークのフローリングが貼られてて、ベッドが置かれている。3畳ぐらいのウォークインクローゼットもあり、以前は寝室として使っていたが、急傾斜のはしご階段の上り下りがおっくうで、寝ぼけながら階段をおりた時に一度足を滑らせて、上からストンと下まで落下してしまった。その時は大怪我した!!と思ったが、たまたま運良く怪我も無く擦り傷ぐらいで済んだが、それからちよつと恐くなってしまい、寝室に使う事をやめ、今は空き部屋状態だ。

だが、屋根裏部屋にあるベッドの真上に、ちょうど大きな天窓がついているので、時々星の綺麗な夜にはここで寝て、夜空の星を眺めて楽しんだりする事はある。

この部屋は星を楽しむ以外に、まあいすてンドグラスのはめ殺しの窓ガラスがついていて、朝方、朝日がその窓ガラスを照らすと虹色の光が部屋に射し込んできて広がっていき、とても美しく幻想的で、杏樹のお気に入りだ。

屋根裏部屋には大きなドーマ（屋根から突き出して設けられた採光

用の窓）がついており、このスペースには厚手の大きな板で作った、作り付けの机があり、以前は書斎として使っていた、急傾斜のはしご階段の問題さえなかったら、なかなか居心地のいい部屋なのだが・・・。

ダイニングキッチンは、陶器のシンクに水栓金具はアンティークなゴールドに陶器風つまみ。壁面にはレンガタイルが貼られていて、システムキッチンの扉は白木でカントリー調。

部屋中央には、同じ白木のダイニングテーブルにベンチ椅子が置かれている。そのちょうど上あたりにカントリー調のロウソク球シェンデリアが下がっている。

カップボードも同じ白木でカントリースタイル。

壁面にはちよつとアンティークな薪が火力のクックストープが置かれていて、寒くなると、ここで薪を燃やし暖をとったり、色々なオリーブ料理や煮込み料理を作ったりする。

すぐ側にはロッキングチェアが置かれていて、冬はここに座って、ストーブの炎を眺めて楽しんだり、温まりながら編み物を楽しんだり、本を読んだりして過ごす。夜長の季節には、とても居心地のいい癒しの場所だ。

あまりにも気持ち良くて、時々そのまま居眠りしてしまう事もある。

ダイニングキッチンには大きな両開きのフレンチドアがついており、そこからウッドデッキに出入り出来る。

そこには、丸い形の白い鋳物のガーデンテーブルとお揃いの椅子が置かれてて、背景は奥深い森で鳥の声がさえずり、家周辺の庭はハーブが沢山植えられている、そんな中でお茶をしたり、食事を楽しみ事が出来る。

ブログにUPされている画像はここで撮影したものである。

ウッドデッキにはこけら葺き（木を何枚も重ねて葺いたもの）の屋根が伸びて庇となっており、デッキ端の方は物干し場になっていて、



洗濯場でもある脱衣室からも出入り出来る扉がついており、日中は、風景画の絵の一部のように、杏樹のお手製の服が干されていて、風にユラユラはためいてる。

3畳大の作業スペースは、ソーイングコーナーとして使っており、カントリー調のシンプルな作業机と同色の木の椅子が置かれている。作業机にはロックミシンとミシンが置かれている。

壁面には整理棚があり、沢山の布地や針箱、ボタンやレースや、小物類などが分類事にぎっしりと分けられて置かれている。

その端にはアイロン台とハンガーパイプがあり、ハンガーパイプにはヤードセール用に杏樹が作った、リネンやコットンのナチュラルなデザインの服がハンガーにかけられて沢山吊るされている。

この中には注文を受けて作った物もある。

杏樹のナチュラルな服はけっこう人気が高く、最近は注文分だけで作るのが精一杯な状況だ。

杏樹自身も手作りの服をいつも着てるので、杏樹の着ている服をお店で見たお客さんが作って欲しいと頼んで来たりという事もある。。

ハンガーパイプ端の支柱には、手作りのリネンバッグも沢山下がつている。

床には大きな籐籠に、手作りのポーチや、ミニコインケース、ティッシュケース、ペンケースなど。。。手作りの小物類が色々。。

本業の焼き菓子以外に、小物や服を作るのに大忙しで、更にブログやメールチェック。。。。

最近睡眠時間が4時間ぐらいしかなくてちょっと体がキツイ。。。そろそろ焼き菓子のネット販売は終了しようとおもっている。。。

寝室には、ブリティッシュスタイルのアンティークな木のベッドにナチュラルなファブリックと、その脇にアンティークな英国製のラ

イティングデスクが置いてあり、そこを書斎コーナーとして使っている。

就寝前、ライティングデスクの机の台になる扉を開けて、ノートパソコンを置いて、電源を入れ、机とお揃いのアンティークな椅子に腰かけて、杏樹は頬杖についてメールをチェックしていた。

「あ．．．また来てる．．．」

ハーブティーの話題がきっかけで、まるでメル友のように頻繁にメールのやり取りをするようになった人．．．。ハンドルネームは”フル”さん。

数日前にネット販売の焼き菓子を購入した人との事で、調べてみた．．．。

工藤 誠一、住所は東京世田谷区．．．マンション10階．．．。

きつとこの人に違いはない．．．。

結婚に失敗して、男の人は懲り懲り．．．結婚も恋愛もう二度としない．．．一人で生きていこうと誓ったから、男性の人とメール交換なんて抵抗が無い訳ではないが、特に下心があるようにも見えないし、真面目そうな雰囲気．．．。

メール内容にそう言う変な兆候が見え始めたら、相手にしないで無視すればいいかなと思いつながら戸惑いながら返事を書いている。

けれど少し、この謎めいた”フルさん”に興味がわきはじめていた。

結婚はもう懲り懲りだから、恋愛感情ではなく、友情みたいな気持ちというのだろうか．．．。

それにこんな森の中の一軒家では、お客さん以外話す人も居なくて、少し淋しい気持ちでもあった．．．。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

杏樹様

今日、ブログのお知らせを読みました。

近々、焼き菓子ネット販売を終了するそうですね。

東京に住んでいるのでなかなかそちらの店舗には行けず、ネットショップで焼き菓子を買って食べる事がとても楽しみでしたので、ちよっと残念です。

ですが、お忙しい身、杏樹さんの体の事を思えば、ネット販売終了も止むを得ないのかなとも思っております……。

その時には、頑張って店舗にまで買いに行こうかなと思っております。

ネット販売終了の事、とても悩んでいる様子が書かれておりますが、睡眠時間4時間はやはり無理すぎだと思えます。

ですので、無理なさらずに……頑張るすぎないでくださいね。

ブログに色々辛辣な書き込みもされてるようですが、気にしない……気にしない……。

時が過ぎれば、そんな批判も消えますから……。  
何かの時には僕がお力になりたいなと思っておりますし……。  
ですから大丈夫ですよ!!

フルより

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

凄く嬉しかった……。

自分の身を案じてくれる人が居てくれる……例え顔の分らないメールだけの繋がりの人でも……。

お店のお客様、製菓材料の取引先の人……いろいろな関わりのある

人は居ても、本当は孤独で独りぼっちだったから……。

ブログで焼き菓子のネット販売終了の心境をUPしたら、殆どがやめないで欲しいの書き込みだった……。

中には怒りを露にする人もいた……中傷的な内容の書き込みもあった……。

確かに自分に非があると思う……。

始めた事を途中で終わらせてしまうのだから……。

お店を始めて、まさかこんなにいい反響がすぐに起きると思っ  
てもいなかった。

もしかしたらすぐにお店が潰れてしまうかもしれないと、不安の方  
が大きかった……。

あまりにも物事がトントン拍子に順調に運んで行ったので、啞然  
と驚いている気持ちもあったし、あまりにも順調すぎて恐い気持ち  
にもなった。

でも、これ以上頑張るのは限界……時には体調が悪くても体にむ  
ち打って頑張った日もあった……。

忙しくて、充実して楽しいのだけれど、ほんのちょっと休みたい……。

ネットショップの注文が多すぎてやりくりできない状況にまで来て  
いた……。

その気持ちを汲んで思いやりのメールをくれたのがフルさん1人  
だけだった……。

時々私の事を知ってるのかなと少し恐い気持ちにもなったが……  
今日のメールは本当にありがたかった……。

「フルさん……あなたは、工藤誠一さん？」

聞きたい気持ちだけれど、もし違っていたらとても失礼だと思うし、

個人情報を知人に教えてしまう事になるかもしれない……。やはり聞けない……。

―――実は、智弘が工藤誠一と言う名前を使って、いつも焼き菓子を注文していたので、杏樹の思っている人とピタリと当て嵌まっていた……。

実はあの隠れ家になっているマンションは、一番信頼の置ける秘書の名前を借りて、秘書名義で購入したマンションだった。その秘書の名前が”工藤誠一” 実在の人物だ。

―――嬉しくて、杏樹は返事を書いた。

\*\*\*

フル様

ご心配下さり、ありがとうございます。

実は私は家族が居ないので、相談する人も、心配してくれる人も居ない身です。

それに結構心が弱くて折れやすいので、思いやりに溢れたメールに心温まり、元気が出ました。

本当にありがとうございます。

嬉しくて感激してます。

杏樹より

\*\*\*

このメールを読んで、智弘は驚いた。・・。

「海藤隆也は君の父親じゃないのかい？　海藤雅也は君の兄さんじゃないのかい？　家族が居ないって・・。君はいたい・・。」

（第6話に続く）

## 第6話 謎の真相・・・あの日の記憶 その1 (前書き)

今回の話と次話は、重い内容の話です。

こう言った表現が苦手な方は、読むのをおやめになるか、十分ご注意の上でお読みになって下さい。

## 第6話 謎の真相・・・あの日の記憶 その1

智弘は、『家族が居ない』と言う杏樹のメールが気になって、杏樹の身の事や家族の事など色々調査してみた。  
調査結果を見て、驚愕した。

海藤リゾートの正当な後継者は、杏樹ただ1人・・・。

杏樹の実の父親である、海藤敬博<sup>かいとう たかひろ</sup>氏は、海藤リゾートの創業者で非常に優秀な人で、敬博氏が社長の頃は環境保全にも力を注ぎ、企業家としても有能で様々なアイデアを生み出し、優良企業で内外からも評価され、会社もぐんぐん成長してあつという間にリゾート業界トップにのし上がった。

ところが杏樹が短大2年の時に、自動車事故で急逝。  
自家用車で仕事先に移動中、運転手のミスによる単独事故で帰らぬ人となった。

杏樹の母は、急遽、海藤リゾートの社長に就任したが、元々家庭の主婦として長年家庭を守ってきた人で、会社については全くの素人で知識も能力も無く、誰が見ても無謀な事だった・・・。

そんな時に杏樹の母に接近してきたのが、あまりいい噂の無い成り上がり企業”双葉リゾート”の社長、双葉隆也<sup>ふたば たかや</sup>・・・現・海藤隆也だった。

杏樹の母はなんとしても夫の会社と社員達を守りたいとの一心で、双葉隆也と結婚、双葉隆也は海藤姓を名乗り、海藤隆也となった。そして杏樹の義理の父親となり、海藤リゾートの会長に就任した。海藤隆也は独身だったが、愛人の生んだ息子雅也がいた。

雅也は杏樹よりも6歳年上で、大した学も無く、放蕩息子として有名だった。



その息子を海藤家の子として養子縁組みさせ、社長に就任させた。

それから間もなく杏樹の母は、謎の死をとげている。

朝、女中が杏樹の母の部屋に行ったら、突然死していたらしい。

表向きの病名は”虚血性心疾患”とされているが、海藤隆也が汚い手を使って殺害したとか、海藤隆也の本当の姿を知って、会社を乗っ取られて悲観して自殺したとか・・・様々な黒い噂が流れている。杏樹は母が亡くなってからすぐに家を出て、高校時代からの親しい友人のマンションに、ルームメイトと言う形で智弘と結婚するまでずっとそこで暮らしていた。

智弘と結婚するまで、杏樹は男性を知らない清らかな娘だったから、間違いは起きてはいなかった様だが、情報では、女性関係にもだらしない雅也が、杏樹の事を気に入る自分の物にしようと事件が起きて、杏樹が家を飛び出して友達の家にも身を寄せていたらしい・・・。

この情報を、玖鳳グループの総帥でもある会長、玖鳳翔馬が知らないはずは無い・・・。

恐らく、杏樹が海藤リゾートの正当な後継者であること、そして、海藤リゾートに乗り込んできた、隆也と雅也親子の描いた黒いシナリオはすでに感づいていて、騙されたふりを装って、海藤親子を失脚させ、海藤リゾートを手中に収める・・・。会長の描いたシナリオは、杏樹と結婚する以前から出来上がっていて、ただそれを実行したまでなのだ。と今頃になって気がついた。

海藤リゾートを手に入れたら、俺と杏樹を離縁させ、杏樹を追い出すシナリオも出来上がっていたのだろうか・・・。

もしそうだとしたら、血の繋がった祖父だとしても許せない気持ちになった・・・。

まるで将棋の駒のように、孫の結婚まで自分の思う様に・・・。なんて冷酷な人なんだ・・・。

杏樹は”フルさん”宛てのメールに『家族が居ない』とつい自分の事を書いて送ってしまったから、ちよつと後悔した。

「素性もよく知らない人なのに……うっかり心を開きすぎてしま  
ったわ……」

――事故で突然父が亡くなったのは、短大2年の間もなくクリスマスという頃だった。

街中にはクリスマスソングが流れ、町ゆく人々は、慌ただしそうなそれでいてちよつと幸せそうな雰囲氣が漂っていた。

高速で取引先に向う途中、路面が凍結してて、車がスリップ。．．．父の乗っていた車は堅牢な外車のリムジンだったが、運転手と共に帰らぬ人となった。

ずっと専業主婦として家庭を守ってきた母が、父の代理として社長就任したが、会社の業務については全くの素人。それは無謀な事だった。

あちこち歪みはすぐ起き始めて、社内は混乱……。何とか杏樹が短大を卒業してすぐぐらいに、言葉巧みに母に接近してきた、同業者の社長、双葉隆也と再婚した。

お嬢様育ちの美しく上品な優しい母に似つかわない、粗野で乱暴で下品で腹の中に黒い物を潜ませているような男……。

杏樹は鳥肌が立つぐらい嫌いだった。・・・。

真つ直ぐで思いやりに溢れ優しく、学も教養も高く、品格もあり立派な父とはまるで正反対のような男……。

こんな人、父だなんて認めない。 . . .  
更に最悪だったのは、その息子。 . . .

頭も悪く、品格も無く、杏樹の事を舐め回すようなねっとりとした視線で見つめてきてゾツとした……。

あの親子が海藤家に入り込んできてから、会社はどんどん傾いて来てしまった……。

企業家としてはやってはならない卑劣な事に平気で手を染め、海藤リゾートの優良企業としての信頼は失墜し、結局会社を乗っ取られてしまつて、財産もどんどん食い潰されて行き……。

その頃、不眠症で精神を病んでしまつていた母は、ある日睡眠薬を大量摂取して、自ら死を選んでしまつた……。

母親が病んできている事は気がついていた……もっと私が気をつけてあげてたら……。

母親を守る事も出来ず、守られてばかりだつた……世間知らずで非力な私……。

独りぼっちになつてしまつた杏樹……。

義理の兄になつた雅也の視線は、更に気味悪い程、杏樹を追い掛け回し、身の危険をいつも感じるようになった。

用心の為にいつも部屋には鍵をかけ、あの男と2人つきりにならないようにいつも気をつけた。

だがある日の夜、自分の部屋で寝ていた時悲劇が起こつた……。

あの男がどういう手を使ったのかは分らないが、鍵を壊して杏樹の部屋に忍び込んできたのだ……。

あの恐怖は絶対に忘れる事が出来ないと思つた。

万が一の為に枕の下に”唐辛子スプレー”を忍ばせていたので何とか逃げ出す事が出来たが……。

逃げ出す為の準備は前もって用意しておいたので、まとめておいた荷物を持って、すぐに友人のマンションに逃げ込んだ。

その後、秘書を通じて義理の父から結婚の話しが舞い込んで来た。

日本を代表する大手企業、玖鳳グループの若社長．．．”玖鳳智弘”との結婚．．．。年は杏樹よりも5歳年上の26歳．．．。

写真付きのお見合いの資料を秘書から手渡されて、学歴を見て非常に優秀で驚いた。そして育ちの良さを感じる上品な美しい面立ち．．．完璧を絵に描いたような人だった．．．。

このまま見つけ出されて、あの薄気味悪い義理の兄に汚されるのなら、この人の妻になった方がどれだけ幸せか．．．。

それに政略結婚だとしても、心を込めてこの人に尽くせばきっと心も通じ合える事が出来るはず．．．。

この人と結婚して、一生懸命努力して、幸せになろう．．．。自分の家族を作ろう．．．。温かい家庭を．．．。

杏樹は決心した。

（第7話に続く）

## 第7話 崩壊・・・あの日の記憶 その2（前書き）

今回は血の要素の含む重苦しいシーンがございます。

こう言った表現が苦手な方は、読むのをおやめになるか、十分ご注意の上でお読みになって下さい。

## 第7話 崩壊・・・あの日の記憶 その2

玖鳳智弘という人は、写真で見るよりも実物の方が数倍も素敵な人だった・・・。

その場に居るだけで、背中からキラキラと後光が差すような、強烈なオーラを持ってる人だった・・・。

こんな大手企業の、いずれトップとなる人・・・結婚の話しも引く手あまただろう・・・。

なのになんで私に白羽の矢が当たったのだろう・・・不思議だった・・・。

こんなに素晴らしい人なら、もっと条件のいい女性を選びそう・・・断られるだろうと思った・・・。

だから結婚が決まった時には信じられないような気持ちだった・・・。

あまり口数の多い人ではなかったし、何を考えているのかも分らない所はあった・・・。

結婚が決まった時には、私のどこが良かったのだろうと真剣に考えてしまった・・・。

智弘さんの笑った顔は見た事が無かった・・・。

大体いつも無表情で、遠い目をしていた・・・それに何処か冷たそうな感じがした。

でも・・・自分には選り好みしている時間は無かった・・・。

あの薄気味悪い義理の兄の手の届かない所に逃げたかった・・・。  
本当にあの日の夜の事は恐ろしく、吐き気を感じるぐらい気持ち悪く不快な記憶だった・・・。

もしあの時、逃げる事が出来なかったら私は死んでいただろう・・・。

。

義理の父に乗っ取られた海藤リゾートにも未練は無かった．．．。  
あれはもう父の会社じゃない！！

あの親子と同じ姓を名乗っている事も嫌だった．．．。結婚して玖  
鳳杏樹として生まれ変わって．．．。幸せになろう．．．。  
努力すれば．．．。きっと報われて幸せになれるはず．．．。

―――そう思っていたのに．．．。  
結婚してすぐに、甘い考えだった事が分った．．．。

特に会話も無く、殆ど家に帰って来ない夫．．．。  
ただ自分の子孫を．．．。玖鳳家の後継者を残す為の、道具なんだ．．．。  
。

―――だけど．．．。それでも．．．。子供が出来たら少しは変わ  
ってくれるかもしれない．．．。  
微かな期待を胸に．．．。耐えてきた。

―――そんなある日、あの義理の父と義理の兄がとんでもない  
不祥事を起した。  
玖鳳グループの乗っ取りを考えていたなんて．．．。  
それに、法を犯す様な事に手を染めていたなんて．．．。  
海藤リゾートは玖鳳グループに吸収合併されてしまった．．．。

―――そして突きつけられた離婚届．．．。  
夫であった智弘さんとは最後に会話を交わす事も無しに、秘書が持  
ってきた離婚届に署名捺印．．．。  
マンションは数日中に出ていくように言われた。

私には何も無くなってしまったと思った。．．。  
心の中には絶望しか無かった。．．。

— ああ。もういいかな。

父と母の所に行こうと思った。

離婚届を書いて、秘書に渡したその日の夜……。

気持ちを静める為に、普段飲まないブランデーを一口飲んだ……。パジャマに着替えて、ベッドに横たわり、ナイフを持ってその手に力を込めた……。

ビリリと左手首に痛みが走って、生温い物がパジャマや寝具に染みていくのが分った・・・。

——このまま寝てしまおう。寝てしまつたら、明日には父と母に会えてるはず。。。。

恐ろしかったけれど、目をつぶって、心を無にした。

\*\*\*\*\*

朝、窓から射し込む暖かい陽の光が顔に当たり、気がついた。昨日カーテンを閉め忘れて、ベッドに入ってしまったのだ。

起き上がって驚愕した。

パジャマも寝具も血で真っ赤に染まっていた。

でも、私は生きている。

結構出血したのだと思う。ちよつと頭がフラフラするけれど、命に別状は無い感じだった。

傷口の血は殆ど止まっている感じだった。・・。



タオルでグルグル巻きにして、傷口を押さえてから、着替えて、寝具も引きはがし、血で汚れた物は全てゴミ袋に入れ口を縛った。

それから窓を開けて空を見上げた……。あまりにも美しくて、見と珍しく雲ひとつ無い澄んだ青空……。れてしまった。

金色に輝く太陽が眩しかった……。目をつぶって、太陽の光を浴びた……。

「あたたかい……」

ポツリと呟いた……。

ああ……。なんて温かくて気持ちがいいんだろう……。深呼吸したら、おひさまの香りがした感じがした。

あの澄んだ青空と、金色の太陽を見ていたら、幸せな気持ちになった……。幸せだなと感じてる自分がいる……。

私の命を救ってくれたのは、お父さんとお母さんじゃなかったのだろうか？

「杏樹……。何やってるんだ！！そんな事しちゃ駄目だぞ！！頑張って生きなくちゃ！！」

「そうよ……。父さんと母さんが、あなたの事を見守ってるから……。大丈夫！！あなたは幸せになれるから、諦めないで！！」

あの澄んだ青空はお父さん……。あの金色の太陽はお母さん……。

「お父さん、お母さん……。ごめんなさい。私……。もう大丈夫！

！」

一生懸命生きようと思った。

自分は何か努力しただろうか……。

何もしないで流されてばかりだった……。

まだ何も始めてないのに、その前から駄目だと決めつけて諦めて……

・愚かだった……。

ふと、昔、私が酷く気に入って、父がプレゼントしてくれた軽井沢の森に囲まれたガーデンハウスの事を思い出した。  
そして父の言葉を思い出した。

「お前が本当に困った時、これを使いなさい!!」

そう言って父から手渡された鍵……それは貸し金庫の鍵だった……。

すっかり忘れていた……。そうだこれがあったんだ……。

私名義の通帳や、あの土地の権利書など、困らないように色々杏樹名義に残してくれた物……。

ふと父の声が聞えた感じがした……。

「お前に出来る得意な物があるだろう……。」

私に出来る事……。

何の役に立つのか分らないまま好きで、趣味で習った製菓学校……

洋裁学校……。

その他習い事オタクで色々な事を習った。

「出来る!! 私にも出来るわ!!」

杏樹は病院に行き傷口を縫合してもらい、一応2日間だけ入院を勧

められ入院。

退院後そのまま軽井沢に向った・・・。

（第8話に続く）

## 第7話 崩壊・・・あの日の記憶 その2（後書き）

重い話しですみません。

なるべく不気味にならないように注意しましたが・・・。

次話からは、主人公は前向きに歩いていく話が続いていくと思います。

## 第8話 軽井沢へ・・・

杏樹の父が残してくれた杏樹名義の貯金は、かなりの額が入っており、普通に暮らしていくには一生困らない程だった。

それに、換金すると相当な額になりそうな宝石貴金属類に、優良株数社と投資適格格付優良の海外国債ファンド・・・あの軽井沢の土地権利書、土地と建物の登記簿謄本もあった。これなら苦労しなくて一生暮らしていける・・・。

―――ただどう言う暮らしをしていけば、私は全く成長できないし、変わる事が出来ない。

「お父様ったら・・・。一人娘の私の行く末をとっても心配して下さっていたのね・・・。それ程までに心配をかけてしまっていた、そんな非力な自分が情けない・・・。」

自分の生活の基盤を作る為に必要な額だけ使わせていただいて、後は自分の生活費は自分が働いて賄おう・・・。  
心の中で父に『ありがとうございます。大切に使用させていただきます』と手を合わせて、貯金通帳だけ持ち出して、後はそのまま貸し金庫に置いておく事にした。

―――いつかこの貯金から使った分を補って、働いて貯金して更に増やせるようになれたらいいな・・・。  
自分で稼いで自分の力で生きていく・・・そんな強い人になりたい・・・。

誰にも頼らずに自分の力で生きていける人に・・・。  
そんな人になれたら、もう誰からも流されずに、人の敷いたレール

の上を歩まされずに、自分の敷いた自分の道を思う様に生きていく。

—  
—  
—  
—  
—  
そうなりたい！！

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

杏樹は軽井沢駅すぐ近くにある、家賃3万円の安アパートを借り、そこを当分の間、生活拠点にする事にした。

それから車を一台購入した。

お洒落な商用車としても使えそうな、荷物も沢山運べそうなコンパクトな1600CCのハイトワゴン車。

メーカーはフランス、色はレモンイエロー、黒い縁取りがアクセントで、サンルフ付き。

後ろは観音開きで、後部席はスライドドア。

二二二二店を始めようと思った。。。

土地と家は、ずっと手入れもせずに放置していた状態だったので、庭は草ボーボーの荒れ放題。．．家もかなり痛んでいた。

お店は、1人で賄える程度の小規模の焼き菓子のお店と、月2回ぐらい庭で手作りの物を販売するヤードセールを開く事にした。日持ちする焼き菓子をネット販売という事も思い付いた。

色々調べたら、焼き菓子に関しては特に資格という物は必要無い事が分った。ただ、店を開くにあたり「食品衛生管理者」の資格が必要だ。これは1日講習を受けたら取得出来るので心配は無さそうだ。保健所からの菓子製造業の営業許可も必要だ……。

キッチン、自家用と共有は駄目で、販売用専門の食品衛生法に則

ったキッチンが必要になる。保健所に行って確認する必要がある。

その前に荒れた庭と、ガーデンハウスのリフォームだわ。．．．それと同時に焼き菓子工房用の厨房も作らないと。．．。

あれやこれや考えていくと、頭がパニックになりそうになる。でも楽しい・・・。

杏樹はやらなくてはいけない事を、ノートパソコンに細かく書き記した。

コツコツ一つ一つクリアして、私の夢を実現させよう。．．．。

「——そうよ。これは私の夢なんだ。生きる希望だ！」

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

———屋敷を出てから間もなく4年になるんだ。私もう25歳か。。。。

杏樹は布団の中で、実父が亡くなってから、怒濤のようなこれまでの日々を思い起こしていた。

今まで体調が悪くても、何とか頑張ってきたけれど、疲れが蓄積していたようで今回ばかりは熱も高く、食品を扱っている仕事の為、無理しすぎて商品に何かあったら取り返しが付かないし、無理して悪化させてしまつては元も子も無い。

思い切って1週間休んで、しっかりと体を治して体調を整える事にした。

風邪で思い当るのは．．． 2日前だったろうか．．．。

年配のご婦人だったが、酷く具合の悪そうなお客様がいて、明日、娘と孫が遊びに来るのでは是非この焼き菓子を食べさせてあげたいと、頑張って買いに来た様子で……。

熱っぽそうで顔は赤く、マスクもせずに、咳き込みながら、わりと長々と孫の自慢話まで始まって、ちよつと苦笑気味にそのご婦人の話し相手になっていた……。

こんな自然豊かな森の中で、風邪をひくなんて……ウィルスに名前は書いて無いけれど……人を疑ってはいけないけれど……あの事が原因かなと思った……。あのご婦人は大丈夫なのかしら？まあ、そんな原因を考えても仕方ないわね……。体を早く治す事を考えないと。

「夏風邪は何とかがひくって言うけれど……」  
またついつまらない事をポツリと呟いた……。

呟いても相手もいないから、ただ自分の声だけが部屋に広がって、消えていくだけ……。

何だか今日はマイナーな事ばかり考えてしまう……。

お店には『臨時休業のお知らせ』まことに申し訳ございませんが、店主の都合により1週間お休みさせて頂きます。』の貼り紙をした。

この貼り紙を貼りに行くのもフラフラで、やっと状態だった……。こんな状況なので、病院にも行く気力も起きない……。 (途中で行き倒れてしまいそうだわ……)

「あゝあ……」

また一つ溜息が出た。

普段、忙しく働いている時には、充実してゆっくり考えている暇も無いぐらいだが、1人ベッドで寝ている時には、つまらない事をあ



れこれと考えてしまう。

それに病気の時には心細く、独りぼっちの淋しさを嫌と言うほど味あわされる。

ブログには、臨時休業のお知らせを載せた。

奇妙なメル友” フールさん” には、『風邪をひいて具合が悪いので、ブログとメールは暫くお休み致します』と書いて送信し、パソコンの電源を落とした。

具合が悪かったので、手短な文章で、素っ気無かったかも知れない・・・。

でも、これでもやっと送信した状況だ・・・。

風邪をひいてもお腹は空くし、喉も乾く・・・。  
だけど起きるのが辛くておっくうだなと思った。

――――そんな時だった・・・。

庭の門を開けて人が入って来る気配を感じた。

そして、玄関の前に立ったなと思ったら、ベルが鳴った。

今日は起きるのもやっとなんと言う感じで、パジャマを着ているし、居留守を決め込む事にした。

だが・・・。

諦めないで何度もベルを鳴らす・・・。

杏樹のガーデンハウスの玄関ベルは英国製のレトロなデザインの物で、アンティークなプッシュボタンを押すと、非常ベルのようにジリジリ音を鳴らすタイプ・・・。

普段は古い英国の映画のような、レトロで味わいがあった気に入っているし、あのベル音がいい雰囲気を感じるけれど、今日みたいな具

合の悪い時には頭に響いてたまった物ではない……。

それになんてしつこいのだろう……。

まるで私が家にいる事を知ってる感じにも思える……。変質者かな？

そのうちドアをトントノックし始め「杏樹……大丈夫か？ 杏樹……」と自分の名前まで呼び始めた。

いったいどういう事……誰なの？

やつの事で起き上がり、ドアチェーンを付けたまままでドアを開けた。

————そこに立っている人を見て、啞然としたと言うか震撼したと言うか……頭が真っ白になった。

「な……なんで……」

熱で頭が変になってしまって、幻覚が見えてるのだろうか？

「杏樹……具合が悪いんだろ……君の事が心配になって来てしまった……」

そこに立っているのは、あの離婚届を秘書を通じて突きつけてきた元夫だった……。

「なんで……」

言いたい事は山ほどあるのに、頭が回らなくて同じ言葉しか出て来ない……。

「あの離婚届は祖父の差し金だったんだ……。すぐに破棄して俺達は離婚してないし、ずっと君を捜してやっと捜し出して、遠くから君の事を見守っていたんだ。

どうやって償おうかずっと悩んでいたし思い続けていた……。

迷惑かもしれないけれど、具合が悪い事を知って凄く心配で、いてもたってもいられなくなって、来てしまった」

「・・・・・・・・」

あまりにも驚きすぎて、何も考えが巡らなくなってしまった。

思考回路は完全に停止状態だった・・・。

これは悪い夢だわ・・・ 完璧頭が変になってしまったのかもしれないわ・・・。

（第9話に続く）

## 第9話 招かざる訪問者

忘れようと思って、忘却の彼方に追いやってしまった人……。そう努力してきた人……。

その人が今、自分の目の前にいる……。

信じられない……。絶対に悪夢だわ……。やっぱり熱が高くておかしくなってしまったのだわ……。

なにも言葉が出て来なかった……。熱が高い事もあってペタンとその場に座り込んでしまった。

「お……。おい……。大丈夫か？」

その幻は、扉を開けようとしてるけれどチェーンがかかっているのが容易には開かない。

……。と思ったのに、この幻は容易に手を伸ばしてヒョイと難なくチェーンを外し、家に入って来た。

『うそ……。』

やっぱり幻だ……。病気の時には嫌な夢を見る事があるけれど、これは悪夢だ……。

だから熱が下がったら、この悪夢は消えるはずだ……。

そうよ……。目が覚めたら消えているはず……。

でも少し変……。離婚した当時の元夫とは少し違っている……。表情も柔らかくなったし、接し方も優しいし、何よりいつも目を合わせなかった人なのに、ジッと私を見てきて目を離そうとしない……。

それに……。あの時よりも年をとった気がする……。私があの時から4年弱年をとったのと同じに、この人もそのぐらい年をとった感じだ……。

なんだかだんだん力が抜けて、意識が遠のいていった……。

――一気がついた時には病院のベッドにいた。

「お．．．おい．．．大丈夫か．．．」

またこの悪夢の元夫が現れた．．．。やはりまだ夢の中なのね．．．。

私の寝ているベッドの側で、私の顔を覗き込んでいる．．．。

ああ．．．でも、こうやって真っ直ぐ顔を見られた事ってあったかしら？こんな心配そうな表情も初めて見た顔だわ．．．。

相変わらず血統の良さを感じさせる綺麗な顔．．．だけど．．．とても憎らしい人だわ！！

「しつこい人ね．．．早く消えて！！許可もなしに人の夢の中に勝手に出て来ないで！！」

もういい加減目の前をチヨロチヨロされるのにもうんざりしてきた。あなたは私の記憶の中から抹殺した過去の人なのよ！！私の許可なしに、勝手に夢の中に出て来ないで！！

「おい大丈夫か？これは夢じゃないぞ．．．熱で頭がボツとしてるのか？」

「えっ？！」

手を伸ばして、元夫の顔に触れてみた．．．。妙にリアルな感触．．．。

夫のほっぺをつまんで捻ってみた．．．。

「あいったたたたっ．．．」

悲鳴を上げる声がリアルだ．．．。

うそ．．．！！これって現実の事なの？

「うそ．．．。本物？」

熱っぽくて涙目になった瞳を凝らしてジッと見た。

「ああ．．．」

頬を擦りながら疚しそうな表情で、元夫が答えた。

「何で．．．。何で私の事．．．知ってるの？」

「お前とメールをやり取りしてた”フル”は俺なんだ．．．。大  
ばか野郎のフルさ．．．」

悪い事をした時の子供のような顔をして、少し上目遣いで杏樹の顔  
色を伺いながら、智弘が答えた。

「ええっ．．．」

またまたショックだった．．．。

本当にこれは現実の事なの？　こんな事って信じられない．．．。  
愕然として、力が抜けた．．．。

これなら悪夢であった方がどれだけましか．．．。

「本当に．．．ゴメン．．．」

頭をペコリと下げて、平謝りする元夫．．．。

そう言えばあの離婚届は破棄したと言ってた．．．という事は、こ  
の人は”まだ夫？”悪夢だ．．．最悪の悪夢だ．．．。

変だと思ってた。お店をオープンするに当たり、家をリフォームし  
て、庭を手入れして、許可を取得して、やっとオープンと言う時に、  
そのままにしておいた住民票をここに移動した．．．。離婚して2  
年半程の年月が過ぎていたのにも関わらず．．．まだ籍は抜けてな  
かった．．．。

だが、私の事などどうでも良くて、届けさえも適当な扱いにされて  
るんだと、そのうち出されるだろうと思ってあまり気にもとめてな

かった・・・。

この人には離婚の意志がない？まだあの悪夢のような生活を望んでるって言う事？

なにも言葉が無かった・・・。

「先生の話しでは、風邪だそうだが、疲れがたまっていて体の免疫力が低下した為、高熱が出たそうだ。

少し脱水症状を起していたそうで、抗生剤と解熱剤を打ったからもう大丈夫でしょうって・・・。だから、今してるこの点滴が終わったら、家に帰ってもいいそうだ・・・。後は家で安静にしてるようにって・・・。

ここで無理したら肺炎を併発する可能性もあるから、くれぐれも無理しないようにと言ってた・・・。

俺が側にいるのは不快に思うかもしれないけれど、少しでも償わせてもらいたいんだ・・・。

杏樹が元気になるまで看病させて欲しい・・・許可しておくれ・・・

」

（ええっ・・・嘘でしょう!!）と思った・・・。

だけど本当に具合が悪くて、喧嘩してるような気力もなかった・・・。

許可するとも、ここから立ち去れとも言えず、ただ黙っていた・・・。

それに・・・頼る人が居なかった・・・。

「分りましたけど・・・私・・・もう夫だなんて思ってませんから・・・」

「でも、俺は別れるつもりはないから。君が許してくれるまで、側で償うつもりだ・・・」

側にずっといるつもりですって!!

「償うのなら、私の目の前から消えて下さい!!」

「死ねって事なのか？」

ちよつと冷や汗を垂らすような、驚いたような深刻な顔をした。

「じゃなくて・・・東京に帰して下さい・・・私が元気になったら・・・」

今は、情けない事にあなたの助けがなければ動けない状態なので、看病は許可します」

私自身なんて勝手な言い分だろうと思ったけれど・・・本当に助けが必要だった・・・

それにこんな事以上に元夫は身勝手な振る舞いを続け、私をズタズタに傷つけて・・・それに比べたら大した事じゃないわよね。

「償うけれど、君の側から消える約束は出来ない・・・」

ずっと君の側で、償うつもりだ・・・会社の辞表も出して来た・・・と言っても、社長が辞表と言うのも変だが・・・

会社は副社長をして来た俺の右腕と、側近に後を頼んで来た。

会長には社長退任の旨を伝えて、勘当を願い出た・・・まだ正式勘当はされてないが・・・全て捨ててここに来た・・・」

啞然とした・・・。なんて言う人なんだろう・・・この人本当に”フール”だわ・・・

――――確信した・・・

「まあ・・・先々の事は、杏樹が元気になってから話し合おう。とりあえず、看病の許可は貰ったから・・・点滴も終わったし、外して貰って家に帰ろう」



―――なんだか心なしかこの元夫がウキウキしてるようにも見える．．．。

「あ．．．看護師さん！！点滴終わったので、外して下さーい！！」

―――やっぱり、浮かれてるように見える．．．。

「早く家に帰ろうな．．．」

―――初めて見た気がする．．．元夫のほほ笑みを．．．。

一瞬天使の微笑みのように見えて、そんな風に思った自分にゾワツとした．．．。

今は病気だから、我慢します。だけど元気になったら．．．ただじやおかないから．．．。

やっと私が築き上げた安住の聖地から、この悪夢を追い出さないと．．．。

（第10話に続く）

## 第9話 招かざる訪問者（後書き）

人間らしい温かな家庭と愛を知らない夫は、人の心の読めない超天然なのではないでしょうか？

逆に、杏樹を通して人らしい温かさや愛を取り戻した時、本当の姿は無邪気で素直で一途な子犬のような人なのかもと予感します。（笑）

## 第10話 献身

「横抱きと、おんぶと、車イスとどれがいい？」  
無邪気な顔をして、この愚かな夫はそう言った。

「えっ……！！」

この話しは点滴が終って家に帰れる事になったので、病院の外に駐車してある車までどうやって行くかという話である。

「歩けますから大丈夫です」

そう言って起き上がったが、平衡感覚が麻痺してしまったのか？なんだかフラフラする……。

「お……おい……。無理して倒れて怪我したらどうするんだ！  
！決められないのなら俺が……」

そ……その手つきは横抱き！！

「く……車イスにします」

触られそうになったので、慌てて即答した。

お任せしたらとんでもない事になりそうだわ……。慌てて一番マシな車イスをセレクトした。

（ああ……。まったく……。風邪をひいた自分を呪いたい気分だわ……。）

だけど……。車イスをセレクトしたのにもかかわらず、ヒョイと横抱きで持ち上げられてしまい、結局ベッドから車イスに移るのに、一番セレクトしたくなかった横抱きをされてしまった。

「キャッ！！」

つい悲鳴を上げてしまう……。

「落とさないから大丈夫……」

（違うんです……そんなことされると困るんです!!）

軽々と智弘に横抱きにされて、車イスに乗せられて……なんだか敗北感のようなモヤモヤした気持ちを感じた。

夫の逞しい腕と頬に当たる夫の厚く固い筋肉質な胸板に、ふんわりと香る品の良い心地よいコロンの香りに少しドキツとした。

ああ……そんな自分が恨めしい……。彼は確かにモデル級の素敵な容姿とプロポーションを持ってるし、頭脳明晰だと思うけれど……人間的に大きな欠陥を持ってるわ……。それにこの私のザマはなんて……恥ずかしい……恥ずかしすぎるっ……。

智弘が車イスを押し、病院の注射室から廊下に出たら、他の患者さんや付き添いの人が皆、こっちを注目してる気がする……。

車イスだなんて凄く大袈裟な感じがするし、風邪でふらついて歩けないなんて……情けないし……車イスを押してる人物が元夫……いえ……未だに夫だなんて……。

駐車場に着くと、サンルーフ付きの白いセダンの外車が置かれていた。

夫の車に乗るのは初めてだし、免許を持ってて、運転出来る事でさえ知らなかった……。

（この車だと1千万〜2千万クラスだわね……。苦勞知らずのお坊ちゃまの彼が、会社を飛び出して何が出来るというの？まさか……ずっと居座り続けて私の安住の楽園でヒモ生活なんてならないでしょうね……）

風邪のせいかな、今考えた恐ろしい悪夢のせいかな……ゾクゾクっと寒気がして身震いした。

（風邪が直ったら追い出そう．．．絶対に！！）

「さ．．．のろう」

智弘から介助されながら、車の助手席に乗り込んだ。

ご丁寧にシートベルトまでつけてくれて、楽なように車のリクライニングシートを倒してくれた。

（随分と気配りが利くようになったのね．．．本当に昔と大違い．．．）

車を発進させて少ししてから、杏樹が聞いた。

「ここまで車で？　1人で？」

「ああ．．．。ずっと行きたいと思ってて、前々からナビにインプットしておいたんだ．．．」

（へえ．．．そうなんだ．．．。お店のHPを見たら場所が分るものね．．．）

「杏樹に会えて、凄く嬉しい．．．ずっと会いたかったよ」  
含羞みながら、柔らかな顔をして微笑む元夫．．．。

（いえいえ．．．私は歓迎してませんから．．．。絶対勘違いしてませんか？　あなたの事許してませんから．．．）

これ以上、智弘がどんな頭の痛くなる言葉を言っただけで、来るとかと思うと、未恐ろしくなって、眠ったふりを決め込んだ。

ただどそのうち体が疲れてて、体調も悪くて、本当に寝てしまった。気がついたら自分のベッドの中にいた。

頭を動かしたらチャポンと水の音がして、枕の上に、タオルに包まれた氷まくらが置かれている事に気がついた。

額の上にもタオルが乗っていた．．．まだ冷たい．．．。

ベッド横のナイトテーブルには、トレイの上にうつぶせに伏せたコップとORS飲料のペットボトルが置かれていた。

今日病院でもらった薬も置いてあった・・・。

（ヘエ・・・結構マメな人なんですね・・・知らなかった・・・）

「起きた？ お粥食べない？ 手作りじゃなくてドラッグストアで買ってきたレトルト物で悪いんだけど・・・」

（え・・・お粥？ 買ってきてくれたの？） そう言えば、とてもお腹が空いていた。

「じゃあ・・・いただきます」

器に入れて持ってきたお粥は、熱すぎず、冷たくもなく適温だった・・・。

スプンにすくって口の中に入れたら、なんとも言えない幸福感がジワジワと広がった・・・。

レトルト物なのに凄く美味しかった・・・。

「おいしい・・・」

本心がポロツと出た。

「そう・・・良かった・・・。沢山食べて早く良くなれよ。食べ終ったら、薬を飲むんだぞ！！」

「はい・・・。あ、そう言えば病院で保険証出せなかったと思うのだけど・・・」

うっかり忘れていた・・・。病院に連れて行って貰ったのに、支払いの事も、保険証提示の事も・・・気にならなくてそのまま帰って来てしまった・・・。

「ああ・・・。保険証出せなかったから10割で精算してきた・・・」

「ガーン!! きっと物凄い高額ね．．．。痛い出費だわ．．．。」

「忘れないうちに、あなたにお支払いしておきます．．．。」  
ナイトテールブルの引き出しからお財布を取り出そうとしたら、智弘に制された。

「知らない．．．。俺はお前の夫だぞ．．．。なんか水臭いな．．．。  
俺が支払って当然だから．．．。」

「だって．．．もう、離婚して他人になったって思っていたから．．．  
今更夫だなんて言われても．．．そんな風に思えません．．．困ります．．．。」

その途端、智弘は悲しい顔をした。

（ああ．．．あからさまにそんな顔しないで!! 私を虐めてるみたいだわ!!）

「俺は絶対に離婚しないから．．．やり直しに来たんだ．．．。」

「そんな事言われても．．．。」

「その事は病気が治ってからゆっくり話し合おう。今は良くなる事だけ考えて．．．。さ．．．もっと食べないと、元氣になれないよ」

「わかりました．．．。」

確かにこの話しは堂々巡りでなかなか解決出来ない感じだ．．．。

「そうだ．．．俺はどこに寝ればいいかな? 床に雑魚寝でも何でもいいけど．．．。」

「あ．．．。ダイニングの所にはしご階段があると思うけど、上に

部屋があつてベッドもありますからそこを使って下さい。バスルームはあその扉、トイレはその隣の扉ですから．．．」

「へえ．．．そんな部屋が．．．ベッドまであるんだ．．．ま．．．まさか．．．恋人でもいるのか?!」

ベッドという言葉に反応して、非常に焦ったような驚いたような顔をして、問い詰めるように迫ってきた。

(ち．．．ちょっと．．．顔近いんですけど．．．)

その突拍子もない一言に頭に血が上った!! だとしたら浮気だって言いたいのか?

「もう結婚も恋愛も懲り懲りですから．．．。この先はずっと独身で自分の力で生きていくつもりですから．．．。」

近すぎる智弘の顔に怯まないように、ギッと睨みつけた。

「ってことは、ずっと1人だったんだな．．．。良かった．．．」

睨みは全然効果ナシで、勝手に喜んでる．．．。

「良かったって?!」

「あ．．．いや．．．」

いったい何を考えているのかしら．．．。早く元気になって追い出さないと!!

「君が寝るまで起きてるから、用事がある時は何でも言ってね」

「もう大分良くなって来ましたから、寝ちゃってもいいですよ」

「いやいや．．．。先生も家で絶対安静って言ってたし．．．。あ．



「氷まくら変えないとな．．．」

「あ．．．どうも．．．すみません」

「んっ？絶対安静？ 重病人じゃないっつーの！！大袈裟な．．．！！」

「汗かいただろう？着替えた方がいいぞ．．．。後で体拭いてあげようか？」

「い．．．いいえ．．．遠慮しておきます」

「なに恥ずかしがってるんだ．．．俺達夫婦じゃないか．．．」

「い．．．嫌ですよ」

布団を引っ張って目深にかぶった。

「全くうぶなんだから．．．」

クスリと笑って、何やら昔を思い出したかのようににやけた．．．。

「まあ．．．俺もお前しか知らないけど．．．。お互いに操を守ったって事だよな．．．」

（ち．．．ちょっと！！なに思いだし笑いしてるのよお！！私の許可なく勝手に想像するな！！）

「じゃあ着替え持ってくるから、後で着替えろよ。えーっと．．．着替えはこっちか？」

「い．．．いいです．．．いいです．．．もう大分良くなりましたから、あとで起きて着替えますから．．．」

「本当に大丈夫か？」

杏樹は何度もウンウンと頷いた。

この人・・・凄く張り切ってる・・・私が病気で寝込んでて何となく嬉しそうに見えるのは何故？

ああ体の免疫力よ！！早くエンジンがかかって全開になって！！早く元気にならないと・・・家に乗っ取られそうな気がするわ！！

（第11話に続く）

## 第10話 献身（後書き）

空気読めないお節介夫にタジタジの杏樹でした．．．。

## 第11話 無期限・観察期間（前書き）

血の要素と残酷的要素を連想させる表現が一部ございます。

こう言った表現の苦手な方は、読むのをおやめになるか、十分ご注意の上でお読みになって下さい。

## 第11話 無期限・観察期間

「あなたにはとてもお世話になりましたし、感謝してますけど．．．もう私の中では過去の人ですから．．．どうか東京に帰って下さい」

ダイニングテーブルに向かい合わせに座って今後の事を2人で話し合っていた。

1週間の休養も今日で終り、体調の方もすっかり良くなって、杏樹は明日からまたお店を再開しようと思ってる。

この数日間、本当にお世話になって、それなのに追い返すような冷たい事を言って、酷い人だと思うし、身勝手だと言う事は十分分かっていても、もう智弘と一緒に住む理由はなくなってしまった．．．。確かに智弘は飛躍的に、まるで別人のように変化したと思う．．．。だけど．．．智弘と一緒にいると、左手首の傷が疼くのだ。勿論もう治ってるから傷の痛みではない。

あの時の苦しみと悲しみが思い出されて、過去に引きずり戻されそうになって、心が痛むのだ。

なんだかこのままズルズルと彼と一緒にいても良くないと思った。

「もう昔の俺じゃないんだ！！だからもう一度俺にチャンスを与えて欲しい。俺は約束する。もう二度と君を傷つけたり裏切ったりしない！！変わった俺を見て欲しい．．．その上で判断して欲しい。

頼む！！」

テーブルに両手をついて、テーブルに頭を付けて土下座のように頭を下げた。

あの大企業の社長、俺様的な傲慢な冷たい夫とは本当に別人だ．．．。

目の前にいるのは．．．奥さんに頭の上がらない、なんとも弱々し

い夫．．．という感じ．．．。

「だって．．．。あなたと居ると、悲しくて辛いあの時の日々を思い出して．．．。この左手首の傷が疼くんです。この左手首の刻印が消し去れないのと同じに、心の傷も消す事は出来ません」

「本当に悪かったと思ってる。俺は父が幼少期に亡くなって、母もすぐに俺を捨てて玖鳳家を出て行ってしまっただけで、家庭とか、愛が何なのか知らないんだ．．．。妻は子孫を残す為の存在．．．。子は玖鳳グループを嗣ぐ為の存在．．．。そう教育されて来た．．．。だから、本当にその点については無知なんだ．．．。

だが．．．。玖鳳家の屋敷を追われて、離婚届を書く事を強要された君の事を知って、慌てて君の住まわされてるマンションに行った時に、赤く染まった寝具とパジャマを見て、君の痛みに初めて気がついて、どれだけ酷い事をしてしまったかやっと分ったんだ．．．。心が抉られるように痛んだんだ．．．。

実は冷たい玖鳳家の生活にはうんざりしてた。

初めは結婚も．．．君はどうせ玖鳳家の財産目当てで結婚した欲深い女、あるいは、何の考えもない親の言いなりで動くお人形のように思ってた。

何もかもうんざりしてて、気がおかしくなる寸前だった．．．。だから俺の一番信頼できる秘書の名義でマンションを買って、そこで1人で暮らしてたんだ。俺が唯一心休める安住の場所だった．．．。

時々屋敷に戻るのには、玖鳳家の子孫を残す為の目的だった．．．。本当に君には酷い事をしたと思ってる。

君をどれだけ傷つけてしまったか．．．。初めて気がついた時心が痛くてしょうがなかった．．．。

凍っていた心に初めて温かな血が通った気がした．．．。

初めて人としての心を取り戻す事が出来たのだと思った。  
そして、一生をかけて君に償おうと思った」

彼も可愛そうな人なんだと思った……。だけど……。

「あなたも痛みを持った可愛そうな人だと言う事は分りました……。  
だけど……。そう簡単に元通りなんて出来ません……。

確かに別人のようにあなたは変わりました……。だけど……。  
もし……。もし……。ここに居たいのなら……。ルームメイトの  
様な形にしませんか？

”保護観察”と言う言葉があるでしょ？ もし同居するのなら”観  
察期間”という形で……。期限は”無期限”で……。

もし私の気持ちが変わって、あなたとやり直したいと思った時には  
またやり直すという事で……。

でも……。その日が来るのは奇跡に近いかも知れませんよ！

”別居夫婦”のような”仮面夫婦”のようなそんな形でもいいのな  
ら、それから私の生活を乱したりしないと誓ってくれるのなら置いて  
あげてもいいですけど……。とても勝手な条件だと思います  
か？こんな形の生活でも良いのですか？」

「俺は意見できる立場じゃないし、側に置いてくれるだけで嬉しい  
よ」

「それから……。ルームメイトという形ですから、夫婦のように私  
に気安く触らないで下さい……。あとは、食費光熱費で毎月10  
万円払って下さい。そうしたら食事は私が用意しますし、掃除洗濯  
もしますから。最後に……。私の機嫌を損ねるような事が起きた  
ら出て行ってもらいますからね!!」

「手厳しいな……」

智弘は焦ったような参ったと言うような顔をした。だが……。

「分った．．．。その通りにします．．．。じゃあ是からよろしく  
お願いします」

「それから．．．。今月の家賃は要りません。病院代払ってもらった  
し．．．。」

「いいのかい？」

「はい．．．。」

「じゃあ是からよろしくお願いします。俺．．．頑張るから．．．  
一生懸命努力して、奇跡を起す事にします」

「．．．．．」

妙に力が入ってて、なんとも言えない．．．。  
だが．．．。智弘を側に置く事になって、一步彼が勝利に近付いた  
ような嫌な予感がした．．．。

もう二度とあんな思いはしたくないし、折角手に入れた自由を奪わ  
れたくない．．．。

この穏やかな生活を奪われないようにしなければ．．．。そして．．．  
彼が失態を犯した時、それを口実につか追いつくぞう．．．。杏  
樹は固く決心した。

「じゃあ私は明日から仕事がありますので、朝早いのでもう寝ます。  
．．．。あなたはそのまま屋根裏部屋を使って構いませんから．．．。」

「分った．．．。もし手伝いが必要だったら、何でも言ってくれ。  
店番でも何でもするから．．．。まあ明日から仕事探しにも行こう  
と思ってるから、出かける事も多いかもしれないが．．．。」

一一一一仕事探し？　ここに本気で居座る気なんだ．．．。



「手伝ってもらう事があったら、じゃあ言いますから．．．」

「ああ．．．。分った．．．」

「じゃあおやすみなさい」

「おやすみ」

杏樹は寢室のベッドに横たわり、溜息を一つついた。

（ああ．．．。とうとうここに住む事を許可してしまったわ．．．）  
その反面少し安心感もあった．．．。とても奇妙な気持ちなのだが、  
．．．明るい日中にはいいけれどこんな森の中の別荘地．．．。ほんの  
僅か、セカンドライフで定住している人も居るが、殆どはセカンド  
ハウスばかり．．．。

シーズン中は人も多いが、シーズンオフとなると、立派な屋敷も主  
が居ない状況で、ゴースト化した家々が森の中に点在するようにな  
ってしまう．．．。

車で少し行けば、この地で生活している地元人の住居もあり、沢山  
のお客様達がお菓子を買いに来てくれるが、ご近所さんと呼べる人  
はすぐ側にはいない．．．。

夜は不気味だ．．．。浮浪者のような者が玄関のベルを鳴らす事も  
あった。

玄関にチェーンを付けていたが、その浮浪者の様な男はチェーンを  
引きちぎって、家に入って来そうな雰囲気だった。

とても恐ろしかった．．．。思わず夫がいる様な風に演じて大声で  
夫の名前を叫んだ。

その途端、慌てて立ち去っていったが．．．。それからは、安全の  
為に夜は門にも鍵をかける事にした。

あの時夢中で夫の名前を叫んだんだっけ．．．。  
今日から脅えなくてもいいんだ．．．。

なんて身勝手なのかしら・・・。

東京に帰って！なんて言っておきながら、一緒に住む事にちよつと安堵感を抱いてるなんて・・・。

愚かな私・・・。

————これからどんな奇妙な生活が始まるのかしら？ あれこれ思いながら、杏樹は眠りについた。

（第12話に続く）

## 第12話 2人の生活の始まり

お店のある日は、杏樹の朝はとても早い。

朝3時45分に起きて手早く身支度して、大体4時頃焼き菓子工房に行く。

手は念入りに殺菌石鹸で洗い消毒、白い作業着とスッポリかぶる作業帽子、長靴、マスクに手袋着用・・・。

この姿だといったい誰なのか分らないぐらいになる。

作業終了時に綺麗に掃除しておいたが、始める前にまた作業台など掃除。

そして菓子工房のコルクボードにプッシュピンで貼っておいた表を見る。

そこには、今日お店に出すお菓子の種類と製作個数を書いた本日の予定表と、時間を無駄にせずに作業できるように組んでおいた、作業工程表が貼られている。

その脇には、いつも取引している製菓材料店、ラッピング材料店、その他の取引店の連絡先と、配達予定日など細かに書いてある。

そして作業スタート！！

レシピは全て頭の中に入っているし、材料配合は杏樹オリジナル・・・。

甘さはやや控え目で、厳選された材料と、細部まで手を抜かない奥深い味わいがある。

お値段は、決して安いとは言えないが、飛ぶように売れる。

初めはマドレーヌやフィナンシェなど、少し生地を寝かせた方がいい

い物からとりかかり、手際よくどんどん作り、寝かせ用のステンレスのキッチンシェルフ棚に並べて、それぞれタイマーを掛けておく。その間に、大型冷蔵庫から前もって作っておいたクッキーの種を出して来て、綿棒で伸ばして型を抜いて次々と天板に並べて焼いていく。

オーブンはプロ用の大型で4段の物が2台ある。8種類の焼き菓子が同時に焼けるシステムだ。

クッキーの焼きが始まった頃に、掛けておいたタイマーが鳴りだし、バターを塗って粉をふって大型冷蔵庫に入れて冷やしておいた型にどんどん流し込んで、フィナンシェとマドレーヌの焼きが始まる。その間にクッキーが焼き上がりケークラーのアミに乗せ冷ます。こうやって手際よく、次から次にオーブンに入れて行き、出来上がった物は種類別にケークラーのアミに並べて冷まし、あつという間に沢山の焼き菓子達が完成し出す。部屋中には、香ばしい甘い香りが広がる。

菓子の粗熱がとれたらラッピング作業・・・。

手慣れた物で、美味しそうな焼き菓子達が更におしゃれして、食べるのが勿体ないぐらいに素敵に変身した。

店舗ディスプレイ用の籠に綺麗に並べて、ショーケースに次々と並べて行く。

1人で切盛りしているので、大量には作れないが、それでも一生懸命頑張ってる。

店舗の陳列が済んだら、前々から注文を受けていたギフトセットを包む。

クッキーの詰め合わせギフトセットが5セット、パウンドケーキ詰め合わせセットが3セット、オレンジシフォンケーキが1セット・・・。

片付けを終えたら、8時45分に作業終了。

いつもは遅い朝食を食べて、掃除洗濯をして、着替えて10時にお店をオープンさせるが、ダイニングキッチンに行くと、慣れない手つきで智弘が作った朝食が置かれていた。

若干焼きすぎのトーストに、少し焦げた固めのスクランブルエッグとフニヤフニヤの焼け具合のちよつと油っぽいベーコン……。

ミニトマトと大きめに千切ったレタスも添えてあった。

智弘はすでに出掛けたらしく、コップに庭から摘んできたハーブの花が生けてあって、その下にメモ用紙が置いてあった。

メモ用紙にはこうかかれていた。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

おはよう！ 杏樹の朝はとても早いんだね。驚いたよ。

朝寝坊してしまって、何も手伝う事が出来なくて本当にゴメン。

こんな事ぐらいしか出来ないけれど、迷惑じゃなかったらこれから朝食は俺に作らせてくれ。

洗濯は君の大事な衣類を台無しにしてしまいそうだったので、やめておいた……。

俺の衣類は触るのも嫌かもしれないと思って、その辺にあった石鹸で洗って干しておいた。（端っこにむさ苦しい物を干させてもらってゴメン。だけど男物の衣類を干してあると、防犯になるかな？）

秘書に聞いたら俺は会社を罷免されてて、退職金も出ないらしい……。 （今までのお詫びに君に渡そうと思っていたのに済まない。だが、会長の知らない俺の口座にはそれなりの額はあるから、生活費の事は心配しなくて大丈夫だ。もし、君が許してくれたら一生養うぐらいの蓄えは十分あるので安心して欲しい）

会長は玖鳳の籍からも抜けろと息巻いているらしい……。願った  
り叶ったりだ！！

君が許してくれたら、海藤姓に改名しても思ってる。（海藤リゾートを復活させたい気持ちを持っているんだ）

無職の男が家にいるのも見苦しい物はないと思うし、自分自身許せない事だ。

出来れば俺の夢だった事にちょっとチャレンジしてみようかなと思ってる。（済まない。給料はあまり期待出来そうにないが・・・）  
兎に角、職探しに行ってくる。

夕方ぐらいには帰って来るので、これらも宜しく頼みます。

フルこと智弘 より

\* \* \* \* \*

コップに飾ってあった花は、手でちぎって生けたようだった・・・。  
杏樹はもう一度茎の所を花切り鋏で水切りして生け直した。

「本当にあなたは変わったのね？」

杏樹は花に向って話した。そしてツンとひとさし指で軽く花をつついた。

杏樹は智弘の水の滴る、洗濯物を取り込んで、洗濯機に入れて一緒に洗った。

「そんな風に洗って干したら、服がガビガビになっちゃいますよ。昨日、掃除・洗濯はしてあげますって言ったのに・・・」

そう言えば、夫の洗濯物を洗うのなんて初めてだなと思った。

夫に朝食を作って貰ったのも初めて・・・。

一緒に住み始めたばかりなのに・・・もう心が揺れ動いている自分に気がついた。

ただ意地で、拗ねているだけののような気がする・・・。

だけどそう簡単には許してあげられない!!

彼がコップに花を生けるなんて!! 明日地球が減んでしまわないかと心配になって来る。

少し焦げたトーストをかじった。バターがたっぷり塗ってあって、ちょっと脂っこかったけれどなんだか美味しかった。

彼の不器用さと一生懸命さが伝わってくる心地良い味だった。

パサパサのスクランブルエッグは味が薄くて、フニャフニャのベーコンと一緒に口に入れたらまあまあの味になった。

「あまり美味しいとは言えない朝食だけど、まあまあ合格よ!」

杏樹はポツリと呟いた。

「1人で頑張るんだって息巻いていたけれど、やっぱり側にいてくれる人が居るのっていいものだね・・・」

これからスタートする奇妙な夫婦の生活・・・。

最悪でストレスがたまって変になってしまわないかと思っていたのに、その逆で心が癒されてちょっぴり期待してると言うか、楽しみのような気がする・・・。

こんな風に思うなんて、想像もつかなかった・・・。

「だけどね、すぐには許してあげないから!!」

杏樹のこの気持ちは、フィルムに包んで暫くは隠しておこう・・・。

「さあ、支度して、お店頑張らないと!!」

知らず知らず鼻歌を歌いながら、杏樹はお店に出る支度を始めた。

(第13話に続く)





## 第12話 2人の生活の始まり（後書き）

焼き菓子工房の情景は想像で書きましたので、実際とは異なるかもしれないが、ご了承ください。m ( ) m

### 第13話 夫の新しい仕事

それから1週間が過ぎた頃だった・・・。

智弘との関係は、まだ夫婦とまではいかないが、智弘の懸命な努力が実って、恋人未満のいい友人関係という雰囲気になった。

朝の早い杏樹の夕食は早い。6時30分に夕食、8時30分から9時にはもう寝てしまう。

今は夕食を食べ終えて、お茶を飲みながら、新しく決まった智弘の仕事の話をしている所だった。

「えっ？ 木工家具製作所？」

「ああ。実は昔から物作りが好きでね、家具職人になりたいって憧れていたんだ。俺には生まれた時から敷かれてるルールがあって、それ以外の道を進む事は絶対に無理だろうと諦めていたんだが、会社も罷免されてひよんな事からチャンスが巡って来たので、頑張ってみようかと思ってね。

この年からスタートだから、一人前になる頃にはいい年齢になると思うけど、おまけに給料も安いし・・・。だけど一生懸命頑張っって、将来は独立して、家具木工房をこの場所で開きたいと思ってる・・・。

こんな俺って魅力ないかな？更に嫌われてしまうかと不安な気持ちなんだが・・・」

それを聞いて、杏樹は素直な気持ちで答えた。

「いいえ・・・。素晴らしいなって思うわ。私だって、不安な気持ちでお店を手探りで始めたから・・・。智弘さんの気持ち、凄く分るの。何でもやってみなければ分らないし、情熱があればいい結果

を出せるって思うし．．．」

「本当？」

「ええ．．．。ただ．．．苦勞知らずでお坊ちゃま育ちのあなたが、でっち奉公的な厳しい職人の世界でやっていけるのかどうかちょっと心配もあるんですけどね．．．」

「うーん。今の意見は微妙な感じだな．．．。そんなにひ弱に見える？ あの偏屈なじいさん（会長）に厳しくされて来たから、根性は一・倍あるし、体力だって結構あるんだよ俺．．．」

「本当？」

「ああ．．．。まあ見ていてよ！！期待を裏切らないから．．．。絶対に泣き言は言わないよ」

「ふふふ．．．。じゃあ頑張って！！明日からお弁当でしょ？作ってあげるわ．．．」

「それじゃあ杏樹の負担が増えてしまうよ。いいよ適当に済みますから．．．」

「職人は体力勝負でしょ．．．。お料理なら私の方が得意だし、遠慮しないでいいわよ。毎日膨大な焼き菓子を作ってるんだから．．．。お弁当ぐらい大した事ないわ。だけど朝はちよつと忙しいから．．．。夜に日持ちしそうな惣菜を色々作ってタッパーに入れて冷蔵庫に入れておくから、朝、お弁当箱にご飯とおかずを詰めるのはあなたがやってね！あとは水筒も自分で準備してね」

「うん。凄く助かるよ．．．嬉しいな．．．」

「休みはいつ？」

「日曜日と隔週で土曜日なんだが、そうすると君とは全く休みが合わないようになってしまっうね．．．」

ちよつと萎れ気味の智弘。

「私．．．お店、土日に休もうかなと思ってるの．．．。と言うのも、雑誌で取り上げられてから観光客の人が押しかけて、1時間もたないうちに品薄になってしまつて、今までごひいきにして下さった地元のお客様が購入しにくくなつてしまつてね．．．。

だからあえて、土日に休もうかなつて．．．。それにちよつと年を取つたのか、最近少し体がきつくて．．．。ヤードセール用の小物や服を縫う時間ももう少し欲しいし．．．。」

心の奥にしまった、智弘との時間も作りたいという気持ちは言わなかった．．．。

「わあ．．．。じゃあ休日が合うね．．．。嬉しいな．．．。」

無邪気に笑う智弘．．．。

杏樹は、まあ．．．。なんて自分の気持ちをはっきり口にする人なんだろうと思つた。

今は夫の方が素直で真つ直ぐで、私の方が捻くれ者で、素直じゃないなと思つた。

一度意地を張つてしまつたら、なんだか素直になれない．．．。仲直りするきっかけを逃してしまつた．．．。まあ、まだ許してあげるにはちよつと早すぎるわね．．．。

「なあ．．．。」

「ん？」

「そのうち木工の腕が上がったら、俺もヤードセールにちよつとした家具を出品してもいいかな？」

「ええ．．．是非。それからこの土地はね．．．。家兼店舗は、猫の額みたいに凄く小さいけれど、土地は2000坪はあるのよ。だから、あなたの工房を敷地内に建ててもいいわよ．．．。」

「ええっ？ いいのかい？」

「ええ．．．。」

杏樹はこの事を言ってから、ふとこれってあなたの事を許しますって言ってる事に近いかしら？とも思ったが．．．結構鈍感な夫は気づいてない感じ．．．。

「嬉しいなあ。あ．．．それから、車は処分して代わりに軽トラを買ったんだ。木材や工具を運んだりするのに重宝するかなってね．．．。もう俺には外車は必要ないからね．．．。」

「あなたって本当に変わったのね？」

「だろ．．．。俺もそう思う．．．。それに今の方が何千倍何万倍も幸せだなんて思うんだ．．．。今まで幸せだなんて思った事があったかなってそんな気がするんだ．．．。幸せって思う事、感じる事ってなんて気持ちいいんだ．．．心地良いんだって思うよ。清々しくて．．．。俺は心の無かったロボットだったんだって感じるんだ．．．。」

彼は相当辛い境遇で育ってきたのかなとそんな気がした．．．  
お金は有り余るほどある環境だったのに．．．可愛そうな人．．．  
心を何処かに置き忘れて．．．やっ取り戻したのね．．．。

4年前の彼は表情もあまり無く一切笑わなかった．．．。

今は毎日目を輝かせながら、くるくる表情を変えて、ニコニコ笑ってばかり．．．。

それにこんなにおしゃべりな人だったんだ．．．。凄く素直だし．．．。人って分らないなって思った。

私の左手首の傷．．．。

いまでは痛まない．．．。その傷の存在を、最近良く忘れてしまっている．．．。

ふと杏樹はあの日の金色に輝く太陽と、どこまでも澄んだ青い空を思い出した．．．。

金色に輝く太陽は、智弘のニコニコ笑う笑顔に似てる．．．。

澄んだ青空は、素直で屈託がない無邪気な今の彼に似てるわね．．．。

目の前に金色の陽と、澄んだ青空が．．．。

いますごく幸せなのかなと感じた。それからとても嬉しくなって、智弘と目を合わせながら、自然と笑がこぼれた。

(第14話に続く)



### 第13話 夫の新しい仕事（後書き）

登場人物少なっ！と思いますが．．．。2人の微妙な心理描写を重点的に描きたくてこんな感じに．．．。

話が進んでいくにつれ、登場しそうな予感がします。 m ( m  
多分頑固じいさん（会長）も．．．。



## 第14話 穏やかな休日

今日は、お店の定休日を土日にしてから初めての休日……。そして、智弘が木工家具製作所に務め始めて初めての休日でもある。

杏樹は、この一週間は慣れない仕事にとっても疲れただろうと、智弘を起こさないようにそっとしておいた……。

きつと熟睡中なのであろう、小屋裏部屋からは何の気配もしないぐらいに静かだ。

杏樹も休日は、たまった疲れと寝不足を補う為に朝寝坊するが、何せ朝のとても早い仕事なので、物凄く朝寝坊したつもりでも朝8時には目が開いて起きてしまう……。

お天気もいいのでシャツ類など大物の洗濯物を洗って干して、普段手の行き届かない場所の掃除を念入りにした。それから庭のお手入れ……。

そうこうしている間に、智弘もそろそろ起きるかしらと、ブランチの準備をし始めた。

キャロットスープに、ベーコンとキノコのマフィンとバナナとラズベリーのマフィンに、グリーンサラダと、フレッシュハーブティ。肉体労働をしている智弘には、焼いたチョリソーソーセージとスクランブルエッグもつけた。

今日のハーブティーは、ローズマリー、レモングラス、ミント……。

庭から摘んで来てサッと洗ったハーブの水を切って、適当な大きさに切って、耐熱ガラスのティーポットに入れて、熱い湯を注いだ。少し時間を置いて濃い目に抽出したら、耐熱ガラスのピッチャーに移して粗熱を取ったら冷蔵庫に……。

智弘が起きたら、氷を入れたグラスに注いで、アイスで頂こうと思

ってる。

今日はお天気もいいし、ウッドデッキのガーデンテーブルでブランチするのが良さそう．．．。

杏樹は白い鋳物のガーデンテーブルの上にランチヨンマットを敷いて、カトラリーを並べた。

テーブル中央には、小さなガラスの花瓶に庭で摘んだ花を生けた。それから深緑色のガーデンパラソルを広げた。

「準備完了!!」

そうこうしている内に、智弘がやっと起きて来た。

「おはよう．．．。すっかり朝寝坊してしまってゴメン．．．」

まだ寝ぼけ眼でバツが悪そうな顔で、頭をポリポリとしながら苦笑した。

杏樹が無期限の観察期間とか、機嫌を損ねるような事があったら追い出すとか、初めにキツイ事を言ったので、いつも腰が低くて、気を使ってる様子で、可愛そうな感じた．．．。

とても疲れてるようなのに、危ない機械も色々使って作業しているみたいで、とても神経も使う大変な仕事だと感じるし、負担をかけてしまつて大怪我に繋がったらと急に不安になった．．．。

「あの．．．。もうそんなに気を使わなくていいですよ。あなたが本当に心底変わった事は分ったから．．．。もう怒ってないので．．．。疲れてるみたいだし、仕事で怪我でもしたら心配だし．．．」  
「――もういいかなと思った。」

離婚届の事は、智弘の知らない所で行なわれた事だし．．．彼もかわいそうな境遇の人だったのだと言う事も分ったし．．．。自分もいつも受け身で、彼とはなし合おうとする努力が足りなかったと思う．．．。だから．．．。

それに、彼の事嫌いじゃないし．．．逆に魅かれている自分に気がついた．．．

「え？」

杏樹の一言に、まだ寝ぼけていた頭がはつきり目覚めた様子で、智弘が驚いた顔をした。

「俺とやり直してくれるの？」

「ブランクがあつたので、そ．．．それは．．．まだちょっと．．．でも、前向きに考えてます」

やり直すと言って、いきなり夫面されても．．．。まだそんな急速に親密な関係と言うのもちょっと抵抗があつた。

「じゃあ、俺達の今の関係は．．．」

「うゝん。交際し始めた恋人同士って感じかしら．．．」  
苦し紛れに杏樹が言った。

「友達から恋人に格上げされたんだ！！やったゝつ。ありがとう！！」

そう言っていていきなり両手で手を包まれた。

「あ．．．。触ってはいけなかった？」

嬉しくてつい杏樹の手を握りしめた自分の行動にハッとして、不味かったかなと、慌てて手を引っ込めた。

「このぐらいなら．．．」

その返事の瞬間、智弘は嬉しそうに瞳を輝かせた。

「抱きしめるのは？」

「まあ．．．そのぐらいなら．．．」

その途端、飛びつくような勢いで、ギュッと抱きついてきた。前よりも腕が筋肉質になって、逞しくなったなと感じた。

「じゃあ．．．キスは？」

「か．．．考えておきます．．．」

恥ずかしくてイエスと言えなかった．．．。ちょっと微妙な気持ち．．．許してあげたいような、まだ早いかなと思ったり．．．。

「出来るだけ前向きにお願いします．．．」

もう一生離れたくないような雰囲気で、いつまでも抱きついている智弘。

凄く切なくて淋しくて、申し訳無くて、嬉しくて．．．。色々な感情が次から次に溢れてきた。

「そ．．．そのうちに．．．。さっ、早く食べましょう．．．ここ．．．外ですし．．．」

いつまでも抱きしめているので、こんな外でちょっと恥ずかしい．．．。定休日だと知らずに店にお客さんが見えたらと思うと心臓が凍りつきそうになった。

「あ．．．うん。家でまた抱きしめてもいい？」

やっと解放してくれたけど、名残惜しそうに照れながら言った。

「また後でね．．．」

そんな彼がちよっと可愛らしく感じた。

本当に．．．シッポを振って戯れついてくる子犬みたい．．．。

智弘は嬉しくて嬉しくてしょうがなかった．．．。

「わあ．．．俺．．．感動で胸がいっぱいだ．．．。だけどお腹はペコペコに減ってるけどね．．．」

智弘の満面の笑顔が、外の太陽の光に照らされて、更にキラキラと輝いて見えた。

「ふふふ．．．。早く身支度して！！頭跳ねてるし．．．。あなたが身支度してる間に、テーブルにご馳走を並べておくから．．．」

「うん。なあ．．．」

「ん？」

「折角恋人同士に昇格したから、君とデートしたいんだけど．．．」

「デート？」

「うん。折角軽井沢に住んでるし、2人で森の中をサイクリングなんてどうかな？」

「うわぁ～すてき～！！って言いたい所なのだけど．．．。私．．．恥ずかしい事に自転車に乗れないの．．．」

「じゃあ今度自転車に乗れるようにコーチしてあげるよ．．．。とり合えず今日は、レンタサイクルで2人乗り自転車を借りよう！！」

「それ．．．。私でも大丈夫？」

「二人乗り自転車（タンデム車）だと、自転車の乗れない人でも大丈夫らしい．．．。チャレンジしてみようよ」

「分った．．．。考えてみたら、観光地に住んでるのに、あまり散策とかした事がなかったわ．．．。頑張ってみる！！」

「ようし！！楽しみだな」

「うん」

2人で軽井沢デート．．．。こんな展開になるとは．．．。

でも、人は時に回り道や過ちを犯しても、遠回りしても、もう一度やり直すと言う事も可能なんだ．．．。

杏樹はそう思った。

もう一度．．．スタートからやり直してみよう．．．。そして、一歩一歩前進して、修復出来ればいいなと思った．．．。

青空のように澄んだ広い心で．．．太陽のように、キラキラと明るい心で．．．。

（第15話に続く）

## 第14話 穏やかな休日（後書き）

二人乗り自転車（タンデム車）は、走行を認められてない地域も多い様ですが……。物語ですので可能という事にしておいて下さい。

m  
（  
m

## 第15話 2人で軽井沢デート

「よし！！行くぞ！！」

レンタサイクル店に行つて、2人乗り自転車を借りてこれから軽井沢サイクリングに出かける所だ・・・。

「なんか恐いわ・・・」

今時珍しいかもしれないが、杏樹は自転車に乗れない・・・。  
今まで乗ろうとも思わなかったし、その必要もなくて乗れない人になつてしまった・・・。

自転車に乗る感覚と言うのが全く見当もつかないし・・・ちよつと恐怖・・・。

「大丈夫！！俺を信じて！！　なんて・・・まだ俺の事、信じきれないかな？」

ちよつと苦笑しながら、杏樹をチラと見た。

「う・・・ううん。信じるから安全運転でね！！」

決心したような真剣顔で、智弘を真っ直ぐ見る杏樹。

ちよつとすがるような目にも見える・・・。

信じると言つてくれたその言葉に凄く感動して、明るい笑顔で杏樹に笑いかける智弘。

「飛ばしたりしないし、大丈夫だよ！！　俺が漕ぐから、杏樹はペダルに足を乗せてるだけでもいいからね。漕げそうだったら漕いでくれ。俺がブレーキをかけて停車したら、足を地面につけて、自転車が走り出したらペダルに足を乗せるんだよ」

「停車中は足を地面に着く、走り出したら足はペダルね・・・分か



ったわ!!」

教習所の講習を受けてるように真剣に、杏樹は言われた事を頭の中で繰り返すように頷きながら繰り返した。

2人で自転車にまたがっていいよスタートだ……。

最初の目的地はから松林の森を抜けて、アンティークな造りの古めかしい純西洋式ホテル。

「じゃあ行くよ……」

「は……はい!!」

自転車が動き出した時、杏樹の心臓は口から飛び出しそうな緊張感だった……。

智弘が漕ぎ始めて、自分の足がフワリと浮き上がったら、慌ててペダルに足を乗せた。

これが自転車に乗ってる感覚なんだわ……。

「なんか不思議な感じ……風を感じると言うか……ふわふわ道路を滑ってるような……楽しい……」

杏樹は目を輝かせて、喜んだ……。

「フフフ……そうかい？面白いだろ？」

「うん!! 楽しいわ!!」

屋敷にいる時には智弘は、背広姿とか、普段着でも高級ブランドのシャツやポロシャツにブランド物のパンツ姿が多かった。

まあ、殆ど屋敷にいなかったし、会う機会も少なかった事もあるし、彼に対してそれ程関心も高くなかった事もあるのかもしれない……。

だからなのか、あまり彼の体のシルエットとか気にした事がなかったし、今まで分からなかったし、気がつかなかった．．．。今日のようにならフなTシャツにジーンズだと、体のシルエットが気になる．．．。

広い背中に大きな肩幅．．．それに筋肉質で．．．。ちよつと逞しさと男らしさを感じてる．．．。そして心が時めいてる．．．。

首筋に浮かぶ汗の粒が．．．。汗で濡れたうなじの髪の毛が．．．。ちよつと男性のフェロモンを感じると言うか．．．。心がちよつとゆらめく感じ．．．。

そんな気持ちを悟られないように．．．。杏樹は、一生懸命ペダルを漕ぎ始めた。

「杏樹が漕いでくれると、ペダルが軽くなるよ．．．。助かる．．．。」

「本当？私って結構力持ちなのよ」

「うんうん．．．。凄い凄い．．．。だけど頑張りすぎると後で足が筋肉痛になって、悲惨な状況になるから程々にな．．．。」

「あなたこそ大丈夫？私って結構重いわよ．．．。」

「軽い軽い！！平気平気！！俺さー。こう見えても自転車少年だったんだ．．．。唯一の癒しって言うかね．．．。

あんな堅物じいさんの、冗談のかけらもないような堅苦しい厳しい躰けを受けて育ってきただろ？時々発狂しそうに心が悲鳴を上げそうになってさ．．．。そんな時には自転車に乗って、遠出してた．．．。

後でじいさんにキツク叱られて、時には殴られもしたけど、全然構わなかった．．．。どんな目にあっても自転車に乗りたくて、乗りたいくてたまらなくてね．．．。自転車に乗っていると、自由を手に入れた気がしてた。

自転車であちこと冒険に出かけてさ．．．ある時は家出して、一晚公園で野宿したり．．．。

留学してじいさんの目が行き届かなくなったら、学校の野郎仲間と一緒に泊まりで自転車の旅に出かけたりさ．．．。楽しかったな．．．」

「まあ．．．。ちょっと意外だわ」

「でしょう？　　なんだかひ弱なお坊ちゃまって感じに思ってた？　　た？」

「うんうん．．．そう思ってた．．．」

「ひつど．．．っ。俺ってさ、結構自然とかアウトドアとか．．．こういう事に憧れて好きでね．．．」

「素敵ね．．．」

「なあ．．．」

「ん？」

「杏樹が自転車に乗れるようになったら、自転車2台で遠出しないか？　キャンプングカーに自転車積んで遠出もいいけどね旅先でサイクリングを楽しむとか．．．。あ．．．これ俺の勝手な妄想だから、嫌だったら拒否っていいからね」

「うん．．．。それ楽しそう!!」

「うわっ! 嬉しい返事だな!!」

2人で風を感じながら、キラキラ緑に輝くから松林を自転車で走って．．．杏樹は至福の一時を感じた．．．。

そして思った．．．。自分の負けだって．．．。

「智弘さんずるいわ．．．」

「えっ?」

何か杏樹を怒らせたのかなと思って、智弘はブレーキをかけて自転車を止めて、振り返って心配そうに杏樹の方を見た。

「なんかいけない事したかな?」

「うん．．．。もう私の負け．．．。あなたの事凄く好きになっちゃったみたい．．．。離れたく無くなっちゃった．．．」

その言葉を聞いて、智弘は嬉しそうに頬を染めて微笑んだ。

「じゃあ．．．」

「だって．．．。全く別人になって私の元に戻って来るのですもの．．．。ずるいわ．．．。これじゃあ、あなたの事嫌いになんてなれないし．．．。離れる事も出来ないじゃない!!」

「またやり直してくれる?」

「うん．．．。私の負けだわ．．．。だけでもう二度と私を悲しませないで!! じゃないと．．．」

「分かってる．．．。もう絶対に杏樹を裏切らないし．．．。離れないし．．．。すごく愛してる．．．。」

智弘は、回りをキヨロキヨロと見回してから慌てて言った。

「キスしてもいい？」

杏樹は含羞みながら、コックリと頷いた。

誰もいないから松林．．．。

自転車と重なる2人のシルエット．．．。後は心地良い優しい風に揺れる落葉松の木のサワサワと言う音だけだった．．．。

（第16話に続く）

## 第16話 夫婦として・・・。

軽井沢サイクリングはとても楽しかった・・・。

沢山笑い合って、はしゃいで、喋り合って、2人で沢山写真を撮った。

2人でこんな時間を過ごすのは初めてだ・・・そして2人ともこんな幸せな時間を過ごすのは久しぶりだった。

家に帰って来て、夕食後ダイニングテーブルで寛ぎながらお茶をする2人。

元々夫婦だった2人・・・。だけどあの時は夫婦であって夫婦じゃなかった・・・。

分ちかえば心通じ合うのも急展開といった感じた。

止まっていた2人の時間・・・これから本当の夫婦としての時間が刻まれていくのだ・・・。

「軽井沢に住んでから、ゆっくり観光地を見て回る機会ってなかったから、今日はとても楽しかったわ」

色白で日焼けしにくい杏樹は、鼻の頭が真っ赤になって火照り顔で目を輝かせた。

「俺も凄く楽しかったよ。明日は2人とも足が筋肉痛かもしれないな」

真っ黒に日焼けした智弘は、嬉しそうに頬杖をついて、杏樹を愛おし気に見つめた。

「杏樹の鼻・・・日に焼けて真っ赤になってトナカイみたいだぞ」  
真っ赤になった鼻が痛々し気で気になってしょうがない。

「えっ？ やだ・・・。私、紫外線に弱いから剥けちゃうかも・・・」

。日焼け止め塗って化粧したのにな．．．」  
鼻の頭を両手で隠して、杏樹が照れ笑いした。

「ちょっと待ってて」

智弘が氷水で冷やしたタオルを持って来て、杏樹に手渡した。

「これで暫く冷やしたら、少し良くなるかも．．．。日焼けは火傷と同じような物だからな．．。冷やすのが一番だよ」

「ありがと．．．」

智弘からタオルを受け取って、鼻の辺りに冷えたタオルを当てた。

「すごく気持ちいい．．．。火照りがみるみるとれる感じだわ」

暫くしてから、智弘が杏樹の隣に椅子を移動させて、顔を覗き込んできた。

「どれどれ．．。良くなったか見せてみて」

「少しは良くなったかしら？」

タオルを外して、智弘に見せる杏樹。

「うん．．．」

難しそうな顔で杏樹の顔を覗き込んだ。

その時だった．．．。いきなりキスをして来て「うん。少し赤みが引いてきたよ」悪さをした少年のようなイタズラっぽい顔をして笑った。

「キャッ!!」

驚きの表情をして、杏樹が「もうっ!」っと苦笑しながら頬を膨らませた。

「ねえ、今日から一緒に寝てもいい？」

「えっ？」

目を丸くして、驚きの顔の杏樹。

「だって．．．。やり直すことにしたんだから、今日から俺は夫でしょ？」

ちよっと甘え顔で杏樹の顔を覗き込む。

その途端クルッと背を向ける杏樹．．．。

「まだ怒ってる？」

背を向けたまま答える杏樹．．．。

「ううん。でも、私のベッドとても狭いわよ」

モジモジと照れながら俯いてホツリと言った。

背を向けている杏樹の後ろから優しく包み込むようにふんわり抱きしめて、杏樹の頭に頬をくっつけて智弘が目を輝かせてこれからの事を語った。

「そのうち屋根裏部屋を2人の寝室にしないか？　もっと大きなベッドに変えてさ．．．。階段は、もっと緩やかにリフォームしよう．．．。杏樹が落っこちないようにね。どうかな？」

「うん。素敵ね．．．。」

智弘の広い胸に身を寄せるように杏樹もこれからの2人に、あれこれと夢を膨らませた。

「そのうち家族が増えたら、家を増築しよう．．．。」

「うん」



「じゃあ仕事頑張って稼げるようにならないとな!! 一生懸命頑張るからね」

「うん。期待してるから・・・」

「じゃあ今晚は? どうする?」

「じゃあ・・・屋根裏部屋で星を見ながら一緒には?」

「うん・・・いいね」

「あの部屋の天窓から見る星は凄く綺麗なのよ・・・。今日はお天気もいいし、天窓を開けて暫く星を見ましようよ・・・。

私ね・・・あのベッドに横になって、お天気のいい暖かい日には天窓を開けて星を眺めて楽しんでいたのよ。

時々スーッと流れ星が流れて・・・とても幻想的で素敵なの。

サイドテーブルの引き出しにね、星観察用の双眼鏡が入ってたね、それで観察してたわ・・・。

月のクレーターも凄く良く見えるのよ・・・。面白くてついつい夜更かししちゃって・・・朝寝ぼけちゃったのね・・・足を滑らせて階段から落ちた時には死んだかと思ったわ・・・」

「大怪我をしなくて良かったよ。早く階段をリフォームしないとね・・・。かわいい奥さんが大怪我したら大変だから。今日は、一緒にベッドに寝ころんで、星を見よう」

「うん」

お互いにおでこをくつつけて、目と目を見交わせて微笑み合った。

「杏樹」

「ん？」

「愛してる。」

「私も。」  
。  
。  
」

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

それから杏樹のお店は午後3時から6時までの3時間のみオープンに変更した。

それでもありがたい事に地元に根づいたお客様は、沢山店に来てくれた。

ヤードセールは月一回だけ開く事にした。その代わりに店舗の端に杏樹の手作りの物を置くスペースを設け、そこで販売する事にした。ヤードセールの事を知らなかった焼き菓子を買いに来たお客様が、手作り品を気に入って、焼き菓子と一緒に買って行く事も多く、作っても作っても品薄状態で、地元のハンドメイド好きな人にスペースを提供して、素敵な作品達も一緒に販売するようになった。

それがきっかけで、店舗前にもスペースを提供して、地元の農家の野菜や、果物、花束を販売するようになった。

店内では卵や牛乳も置く様になった。・・・。

だんだん何屋さんか分からなくなりつつあるけれど、スペースを提供している特権で、いいお野菜や果物、卵、牛乳などをいつも安く入手出来るし、頂く事も多く、毎月の食費は殆どかからないのじゃないかと言うぐらいで、ありがたかった。

又、地元の人が沢山集まって憩いの場所のようになって、とても楽しかった。

杏樹の住居のデッキのガーデンテーブルにもいつも人が集まって、笑いが溢れていた。

○お店の時間を変更したのには訳があった。

肉體労働の智弘に、ポリウムたっぷりで、栄養バランスの充実したお弁当を作って持たせてあげたいし、疲れて帰って来る夫の為に美味しい晩ご飯を作って待っていたかった。

家事も手抜きをしないでちゃんとこなしたかったし、夫と一緒になら経済的にもゆとりが出来て利益を求めるよりも、少し仕事をセーブして、2人の時間を増やしたかった。

近い将来には家族も増えるかもしれない・・・健康にも気をつけてあまり無理をしたくない。

休日には、厳しい?! 智弘コーチの指導で家の前で自転車の練習。

案外とバランス感覚の良い杏樹はすぐに自転車に乗れるようになり、休日一緒に軽井沢を2人でサイクリングが決まり事のようになった。杏樹のお店のブログにも『旦那さん』という名称で、2人の写真が直々登場するようになり、旦那さんファンが沢山増え、時々月一回のヤードセールの際に手伝う生旦那さんを見にやって来る人も現れた。

ヤードセールには、旦那さん作のブックエンドや、飾り棚なども販売されるようになり、なかなかの人気商品だった。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

やがて季節は秋から冬になり、  
11月には初雪、  
12月には一面真っ白な世界に変わった。

休日杏樹は智弘と一緒に、お店脇に植えてあるとても立派なモミの

木に、クリスマスの飾り付けをしていた。

「昨年は、ハシゴに上って1人で一生懸命飾り付けして大変だったから、とても助かるわ．．．」

「そうかい？とても役に立ってるようで俺も嬉しいよ。これはこの辺かい？」

智弘が赤いガラスの飾り玉を持って、杏樹の指示の下、木の枝にひっかける。

「そうね．．．。いい感じ．．．。あ．．．それはもうちょっと左．．．うん。そう．．．」

モミの木の根本周辺に、電飾の置物を並べてクリスマスの飾り付けは完成した。

「それじゃあ．．．いよいよ点灯して見るか？」

「ええ．．．。凄くワクワクだわ．．．」

「いくよ」

智弘が家脇のスイッチに手をかけ、onにした。

「うわぁ。綺麗．．．」

モミの木や、店舗ガーデンハウスの電飾がキラキラと瞬き、とても幻想的な情景だった。

「本当に見事だな．．．。まるでサンタの家の様だよ．．．」

「ふふふ．．．。本当に．．．うちじゃないみたい。素敵だわ」

「よし．．．。早速写真をとって杏樹のブログにUPしないとな．．．」

「最近『旦那さんファン』が増えてちよつと焼けるわ．．．」

「焼きもちを焼いてくれるなんて！！俺も出世したなあ．．．。だけど俺は杏樹一筋だから．．．それに杏樹ファンの野郎の方が心配だ．．．。いつもブログで杏樹ファンの野郎に睨みをきかせてるんだ！！」

「え？そうなの？」

「気をつけないと、フルのような奴とメル友になってしまうし．．．」

「それってあなたじゃない！！」

お互いに顔を見合わせて笑い合っている時だった．．．。

東京のナンバーの車が家の前に止まり、中から第一秘書の関谷が降りてきた。

とても慌てた様子だ．．．。

その姿を見て、智弘の顔が陰しくなった。

「関谷！！お前には何度も言っただろう．．．もう戻る気は無いし、それに俺は罷免された身だ。社とは何も関係のない身分だ。ここまでのこのこやって来るとは呆れるな．．．」

「社長お願いします．．．すぐにお戻り下さい．．．会長がお倒れに

なりました」

関谷が血相を変え苦悩の表情で言った。

「えっ!!」

(第17話に続く)

## 第16話 夫婦として・・・。（後書き）

お気に入りに入れて下さっている読者様&毎回読んで下さっている読者様・・・ありがとうございます。更新遅くなってますみませんでした。

やっと1人セリフ付きの登場人物が現れました・・・。  
何やら起きそうな気配です。（^^;）

## 第17話　また離れ離れに・・・

智弘は祖父である総帥から、玖鳳家とはもう無縁の者だと縁を切れ追い出された身。

だから総帥とはもう無関係だと、頑なに戻るのを拒んだ。

だが、幼い頃より愛も無く厳しく育てられてきたとは言え血の繋がったたった1人の家族だ。

本当は、心配で会いに行きたいのではないかと杏樹は思った。

杏樹の事を気遣って、やっと夫婦として心が通い合ったのに、また離れ離れになって淋しい思いをさせたり、不安がらせたり、心がすれ違ってしまふ事を恐れて、行くのを躊躇しているのではないかと・・・。

――杏樹は思った。

そうだわ・・・私が彼の背中を押してあげれば、気兼ねなく、おじい様に会いに行く事が出来るだろう。

また引き裂かれるような事をされないか、彼が戻って来てくれなかったらどうしようと、色々不安が無い訳では無かったが、たった2人きりの家族だ。許される身ではないけれど、私にとっても義理のおじい様・・・。

おじい様も口では強気な事を言ってたが、本当は会いたいに違いない・・・。

自分の我が儘を通して、彼をここに引き留めて、一生おじい様と会えなくさせてしまったら、彼は心の中に後悔の気持ちをずっと持ち続けてしまうかもしれない。そんな事はしたくなかったし、させたくなかった。

何と言ってもたった1人の身内だ・・・。

私にはもう血の繋がった家族は誰もいない・・・。だから、会いたい気持ち、淋しい気持ち、心配する気持ちが痛い程分かる。



杏樹はとりあえず、東京からはるばる尋ねて来たのだからと、智弘とゆっくり話しが出来るように、関谷を客間にも使っているダイニングルームに通して、コーヒーとお手製の焼き菓子を出した。

関谷の話しでは、総帥は意識は取り戻した物の寝たきりの状態で、容体も不安定で、いつ不測の事態が起きるか分からないような状況だとの事だった。

この事が外部には漏れないように、手を打ってはあるが、パツタリと姿を現さなくなった総帥に対しての悪い噂は少しづつ広まり始めているとの事で、更に、会社内部でも混乱が起きはじめており、悪い噂と重なり株価も下落し始めており、このままだと膨大な社員とその家族達が路頭に迷ってしまう事態も起き兼ねないとの事だった。

杏樹は智弘に、正直な今の自分の気持ちを伝えた。

「智弘さん、おじい様に会いに行って来て！！会社の方も大変みたいだし、この状況を見過ごす訳には行かないと思うの・・・」

大会社の1人息子・・・。沢山の社員とその家族達の事を無視して好き勝手には出来ない。公人に等しい立場でもあるし、責任のようなものもある。総帥が元気な内は、我が儘も通ったかもしれないが、状況が変わってしまった。

多くの社員の生活と家族を守る責任がやっぱりあると思った。

そして、今行かなかったら彼はきつと後悔する。智弘さんに後悔して欲しくないと思った。

智弘は、心配そうな顔で杏樹を見て言った。

「杏樹はそれでいいのか？ 離婚届を書かされ、玖鳳家を追い出され・・・。君がどれだけ酷い仕打ちをされて来たのか？それなのに許せるのか？」

「確かに、色々あったけど、智弘さんは離婚届を破棄して、私を追

いかけて来てくれたじゃない。そして、今日までとても大切にしてくれたし……。それで、十分だわ。あなたの温かい優しい本当の姿を知って、過去の事はもう忘れようと思ったの。と言うか、いつの間にか自然と忘れてしまったわ。あなたを信じてるし、不幸になつて欲しくないし、後悔して欲しくないし、たった1人の家族じゃない……。会いに行つてあげて!! 会社の事も放っておけないわ。あなたの力を皆、必要としてるのと思うの……」

「でもなあ……」

「私の事は心配しなくて大丈夫だから。ここであなたの帰りを待っているから……。今後の事は落ち着いてから話し合ひましょう……」

「今後の事って……」

ちよつと不安げな智弘。

「離婚はしないから、私達夫婦よね? だから、これからの事を2人で解決して行きましょう……」

「それで本当にいいのか?」

「ええ。もうあなたを追い返したりなんてしないから……。ずっと待つてゐるから、安心して行つてきて!!」

それから暫く考え込んでいたが、決心したように智弘が頷いた。

「分かったよ……兎に角、総帥の見舞いに行つてくるよ」

「本当は、私もお見舞いに行かなくてはいけないのかもしれないけど……。会えるような身じゃないから……。私はここからおじ

い様が良くなるようにと祈ってるわね」

「ありがとう．．．。俺も、なるべく早く戻って来るようにするから．．．。」

「無理はしないでね」

「ああ．．．。杏樹も昔みたいに無茶しすぎて体を壊さないように気をつけるんだぞ。俺の一番の大切な家族は杏樹なんだからね．．．。その事を忘れないで欲しい」

「ありがとう．．．あなた」

智弘は杏樹から『あなた』と呼ばれて、心が切なく震えた。

やっと夫婦らしくなってきた所だったのに．．．。もっともつと一緒に居たかったのに．．．。ほんの僅かとは言え離れたくないような、一緒に東京まで連れて行きたいような気持ちだった。

血の繋がった祖父の容体の事はとても気になるが、杏樹の事も心配だ．．．。やっと手に入れた大切な宝物．．．離れたくない．．．。

それに何やら嫌な予感の様なものがした。何なのかは分からないが．．．。見えな不吉な予感と言うのだろうか．．．。

だが、俺は絶対に杏樹とは別れ無いし、杏樹もきつとそうだ。

2人の心がしっかりしていれば、この先もきつと大丈夫！！智弘は決心した。

――翌朝、簡単に支度を整えると智弘は関谷と共に、関谷が乗ってきた車に乗り込んだ。

「いってらっしゃい」

「ああ．．．。なるべく早く戻って来るから」

「心配しなくて大丈夫よ、待ってるわ」

お互いに身を切られるような気持ちだった．．．。

杏樹は思った。

離婚届を書くように強要されたあの時よりも今の方がずっと辛く苦しい。

いつの間にか、自分にとって大きなかけがえのない存在になってたのね。

でもあの時のような絶望感はない。辛く苦しいけれど、私の所に戻って来てくれると言う心の支えがあるから。

待ってるからね。この先の2人の幸せの為に．．．。

1つ1つ問題を乗り越えて、一緒に頑張るつもりで前に進んで行きましょうね。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

軽井沢で智弘と一緒に迎える初めてのクリスマスだった。

一緒に飾り付けをしながら、杏樹は幸福な気持ちに満たされ、他愛ない小さな夢をあれこれ思い描いていた。

プレゼントは何にしよう？お料理は何かいいかしら？

クリスマスシーズンはかき入れ時で、お店が忙しくて、そんなに手の込んだ料理は作れないけれど、前もってコツコツ準備して置こう。あのストーブでコトコトとビーフシチューを煮込んで．．．。マッシュポテトの山に、ブロッコリーや星形にカットしたニンジングラッセやミニマトでクリスマスツリー風のサラダを作って．．．。ガーリックフランスパンに、サーモンマリネ．．．。シャンパンと

赤ワインどっちがいいかしら？

―――だけど智弘はいない……。

1人のクリスマスは淋しくて、結局普段通りで何もやらない事に決めた。

小屋裏部屋に続く緩やかな階段……手すり……。

杏樹が落ちないようにと智弘がリフォームしてくれた。

そして小屋裏部屋には、大きめのベッド……。智弘がいないとベッドがやけに広く感じる。

毎晩、星を眺めながら、あれこれとお喋りしたり……。智弘の広い胸と大きな腕に包まれて、安堵の気持ちで眠りについて……。淋しいなと思った。無性に淋しい……。

総帥は半身不随の寝たきり状態となり、意識はハッキリしているそうだが体の自由が利かない体となり、総帥の業務は臨時で智弘が代理で受け持つ事となり、色々残務整理に追われて、ゆっくり電話をする時間も無く、簡単なメールの交換だけの状態が続いている。

もう表舞台に立てなくなってしまった総帥から、今までの事を詫びられ、智弘は何度も社の事を任すと頼み込まれ、体調も不安定な状態で心臓も弱っている総帥の体の事を気遣って、断る事も出来ず、今後の事をどうすればいいのか、困り果てていた。

この事は杏樹にも相談したが、杏樹もどう返答していいのか分からなかった。

会社を捨てて、自分の所にもどって来て欲しいだなんて……。そんな事とも言えない。

沢山の社員と家族、会社と関連のある企業の社員とその家族の生活だってある。

だけど、もう智弘と別れる事も出来なくなっていた。

杏樹自身も智弘を必要としている……。でも、自分のお店を閉め、ここを離れる事も出来ない。

お店を必要としてくれる沢山の人達がいる。

自分の熱い思いの籠ったお店……。簡単に離れられない……。兎に角、落ち着いたら一度智弘がここに戻って来て、その時じっくりと話しあって決めようと言う事になった。

――そんなある日の事だった……。

杏樹の店の前に東京ナンバーの高級外車が止まり、中から杏樹と同年齢ぐらいの華やかな美しい女性が降りて来て、お店の中に入って来た。

「いらっしやいませ」

「こんにちは、あなたが杏樹さんですか？」

「はい」

「実はお客として来たのではなくて、杏樹さんとお話しがしたくて来ましたの」

「は……い」

「実は私<sup>わたくし</sup>、杏樹さんと離婚話が出ている頃、智弘さんの再婚相手として総帥から是非にと望まれた、鷹乃宮千晶<sup>たかのみや ちあき</sup>と申します」

「えっ？」

（第18話に続く）



## 第18話 不吉な風

再婚相手として総帥が強く望んでいた人・・・鷹乃宮千晶さん。  
もしあの時、智弘が離婚届を破棄せず、離婚が成立していたら・・・  
。そして再婚していたら、この人が智弘の奥さんだったのかもしれない。凄く複雑な気持ちだ。

いったい何の用でこんな遠くまでやって来たのだろうか・・・。

なにやら話しがあるとの事で、お店が閉店後にまた尋ねてもらう事にした。

そして、再度千晶が尋ねてきたら、居間でもあるダイニングルームに通した。

キョロキョロと目だけ泳がせて、物色するように見回す千晶。

少し蔑んだような、怪訝そうな表情を浮かべる。

「どうぞこちらにお座りになって下さい・・・」

杏樹は薪ストーブに一番近い温かな一番良い席に千晶を案内した。

「失礼するわね」

杏樹は焼き菓子とダージリンティーを千晶に出した。

「手短に用件だけ話すわね。総帥はとも嘆いておいでだわ・・・」

「えっ？」

「智弘さんが玖鳳グループを抜けて、総帥がお体を壊してから、株価が急下落している事はお分かりかしら？」



「はい。詳しい事までは存じませんが、下がっていると言う事は関谷さんから聞きました」

「それでね、玖鳳グループは今。窮地に追い込まれているのよ。社の中東支社の石油開発事業部で、とてつもない大きな損失を出してしまつて……。更に今回の事で、赤字は物凄い勢いで増え続けているわ。

今、大きな後ろ盾となる企業を必要としてるわ。その一番の候補がうちの父の経営する会社なのよ。

智弘さんが今懸命に会社建て直しを図っているけれど、ものすごく厳しい状況よ。

私の父は、若い頃総帥にとっても可愛がってもらつて、その後独立して企業を興したから、総帥に恩があるし、智弘さんの事も幼い頃から良く知ってるし、婿に来てくれたらと願つてるわ。だから……」

杏樹は口を挟むように、千晶の身勝手な言葉を遮り、抵抗をするように、少しきつめの口調で言った。

「私、智弘さんと別れるつもりはありませんから……」

その言葉に千晶がムツとする。

「杏樹さん……。あなたには何ができるといふの？ 智弘さんの支えにどうやってなつてあげられるの？」

それを言われるとハッキリした解答が出来ない。

「貴方は昔は大手企業のお嬢様だったかもしれないけれど、今はただの小さなお店を切盛りする女店主でしょ？ そんな貴方がどうやって支えられるの？」

「それは……」

「あ．．．。心の支えとかそんな言葉では私は納得できないわ。実質的に何ができるのかしら？」

確かに今の自分には、実質的に支えられるものはない．．．。だが．．．。

「確かに今の私には大した財力はありません。ですけど、智弘さんが必要としている人は千晶さんではなくて、私だと思ってます。それに、今の智弘さんはお金の為に離婚や再婚をするようなそんな人ではありませんから．．．。何を言われようとも別れるつもりはありませんので．．．。」

「もともと．．．。」

「え？」

「もともとあなたとの政略結婚が決まるまでは、私との結婚話が出ていたのよ。それを突然あなたが奪ったのよ！！」

「何を言われても、私も彼も別れるつもりはありませんから．．．。」

「まあいいわ．．．。そうやっていい気でいられるのも今のうちね。お邪魔したわ」

凍りつきそうな不敵な笑みを残して、千晶は帰って行った。

千晶が帰って行ってから、杏樹は千晶に出したティーカップの紅茶をシンクに流した。

ひと口だけ飲まれたダージリンティー。ティーカップにほんのり付いた千晶の鮮やかな赤い口紅．．．。

凄く嫌な気持ちになって、汚れてしまったカップを浄化するような

気持ちで、泡だらけにして何度も何度も洗った。

それから彼女が口を付けなかった焼き菓子を、ゴミ箱に投げ込んだ。お菓子を愛してるから、いつもはこんな酷い粗末にするようなことはしないし、お菓子に罪は無いのに……。

『今日だけはゴメンね。許してね……』愛らしいお菓子達に心の中で謝った。

夜寝る前に智弘にメールを送った。他愛ないメール……。

『そちらの様子はいかがですか？こちらはいつも通りよ。クリスマスのお翌日だからなのか？今日は珍しくお客様が少なくて暇でした。風邪などひかないように、温かくしてね。ではまた……』

今日千晶が来た事は、書かなかった。大変そうなのに心配をかけたくない……。

送信ボタンを押して、携帯を枕の横に置いた。

就寝前のこの時間……いつもならわりと早く返信が来るのに、今日に限っては全く来なかった……。

そのこともあってか、なんだかとても切なく淋しく悲しくなってきた。

まるで流星のように、目尻からスーッといくつも温かい涙の雫が流れ、枕に落ちては消えていった。

「嫌だ……涙が出て来ちゃった。なんだか子供みたい……」

寂しくてメソメソする子供みたいな自分が可笑しくて、なんか笑えちゃいそうなのに、笑えない……。

涙は後から後から、溢れ出し止まらない。

やがて泣き疲れ、段々うとうと……睡魔が襲ってきた。

夢と現実の狭間なのか？とてもリアルで不思議な夢を見た。

ベッドの自分の右隣……智弘がいつもいた場所。今は空っぽで淋しい場所……その場所がギシリと沈み、智弘が居るような……そんなリアルな感覚がした。

「杏樹．．．」彼に呼ばれてる感じもした。

「ん．．．」

その呼びかけに答えたくて、返事をしたいのに声が出ない．．．。夢でいいから私の側にいて．．．消えないで．．．。あなたの温かなぬくもりを知ってから、臆病になってしまった。独りぼっちは淋しい．．．。

智弘の幻が消えてしまうのは嫌．．．もうちょっと居て欲しい．．．。切なくて涙が溢れてきた．．．。

「いけないで．．．」

やっと声が出た．．．。夢見心地の中で、何故かホッとした。

「ここにいるよ．．．」

フワリと抱きしめられて、彼の温かな体温がジワリと杏樹の体を包み込んだ。

頬にキスを落とされたそんな感触がした。

「杏樹．．．泣いてるの？」

その声が、とてもハッキリ聞えて『え？』と思い現実に取り戻された。

――驚いて、声が出なかった。本当に智弘が居た．．．。

まだ頭がハッキリ起きていない状況で、この状況が飲み込めなくて、頭の中が真っ白になって固まってしまった。

「ゴメン驚かせて．．．。眠っていたから起こすのは悪いかなと思って、隣で起きるまで見守っていた」

「なんで？」

「クリスマスには絶対戻って来ようと思っていたのに、遅くなって

ゴメン。杏樹にすごく会いたくて、時間が少し出来たから車を飛ばして戻って来たんだ」

「会いたかった・・・淋しかったわ・・・」

嬉しくて嬉しくて・・・智弘にしがみつく様に抱きついた。

「俺も・・・寂しかったよ・・・凄く会いたかった！！」

そんな杏樹を受け止めるように、智弘も愛おしそうに抱きしめた。

聞きたい事話したい事は沢山ある・・・。

だけど今は、お互いのぬくもりを感じていたい・・・。

今はただこうやっていたかった・・・。

（第19話に続く）

## 第19話 2日遅れのクリスマス

「あったかい．．．」

智弘の腕の中に優しく包まれて、じんわりと伝わる智弘の体温のぬくもりに幸福感を味わう杏樹。

2人の甘い時間がこのまま永遠に続いてくれたらいいのに．．．。お互いに求め合う気持ちは同じ．．．離れたくない．．．離れられない．．．。

「杏樹．．．」

「ん？」

「愛してる．．．」

「私も愛してる．．．」

「もう泣かせないって決めたのに、不甲斐ない夫でごめん」

「ううん．．．。そんなに自分を責めないで。戸惑うあなたに行って来て欲しいって背中を押したのは私よ。それに会社が窮地に追い込まれてる状況なのに、このままそ知らぬふりは出来ないわ」

「ありがとう．．．。俺の力が必要とされてるのなら、手を貸さなければと思ってる。だが、今の時代ファミリー企業なんてもう古いと思ってる。俺は仮の代表のつもりでいるし、信用できる適任者が見つければ、任せたいとも思ってる。今、懸命に捜している所だし、あてがない訳でもないんだが、慎重さも要さなければいけない事だし、もう少し我慢して貰う事になると思うのだけれど．．．。杏樹

の事が心配で・・・」

「私は大丈夫よ。待ってるから・・・。まさか突然にあなたが戻ってくるなんて思ってもいなかったから、弱虫な姿を見せてしまつてごめんなさいね。焦ったり、無理はしないでいいから。玖鳳グループを見捨てて私の所に戻って来て欲しいだなんて我が儘も言わないし、私自身どうすればいいのか今はまだ先が見えない状況だけれど、あなたと一緒にこの状況を乗り越えて行けたらいいなって思ってるから。あなたを応援する気持ちでいるのよ」

「うん。さっき泣いていたけれど、何かあったんじゃないか？」

「う・・・ん。鷹乃宮千晶さんが尋ねて来たのよ。あなたと結婚する前に、花嫁候補として名前が上がっていたらしくて、再婚相手にも名前が上がっていたそうで、別れて欲しいって言われたわ。千晶さんの家には玖鳳グループを支えるだけの財力があるけれど、あなたには何もないとも言われたわ。だけどね、それでもあなたと別れないし、千晶さんにもそう伝えたわ。千晶さんの前では気を張っていたけれど、彼女が帰ったらちよつと気が抜けてしまったのよ」

「あの子がわざわざここまで来るなんて驚いたよ。俺は絶対に杏樹と別れるつもりはないから、安心してくれ」

「うん。信じてるわ」

「俺のかみさんは杏樹だけだから・・・」

「うん。私の夫もあなただけよ」

智弘が戻って来てくれたら、先程までの不安感は何処かに消え去っ

て、気持ちも軽くなった・・・。

何をそんなに不安に思っ、悲しんでいたのだろうか？ 彼が側にいてくれれば、あんな事ぐらい何でもないと考える程小さな事なのに・・・。凄くセンチメンタルになってしまっ・・・。

折角智弘が来てくれたのだから、もっともっと一緒にいたいと杏樹は思った。

「クリスマス後で、お客様も少ないし・・・。明日、と言ってももう時刻は明日だけど・・・。休んじゃおうかな？」

杏樹がイタズラっぽい表情で、智弘を見つめた。

「本当？嬉しいな・・・。いいのかい？」

頬を紅潮させ、目を輝かせる智弘。

「うん。臨時休業の貼り紙をして来ないといけないわね」

「俺に任せて！！」

鉄砲玉のようにベッドから飛び出ると、素早くお知らせを書いてパジャマ姿のまま飛び出していった。

「まるで少年みたい・・・あの素早さはピーターパンだわ」

その姿がとても愛おしく、ベッドの中から目で追いながら微笑む杏樹。

暫くしたら、慌てて舞い戻って来て、ベッドの中に滑り込んできた。

「ふー。流星に一瞬とは言え外は心臓が凍りつきそうに寒かったよ・・・」

冷えた体で杏樹に抱きつく智弘。

「きゃっ！！冷たっ！！」



「杏樹の体は温かいなあ」

「もうっ。こんなに冷えきってしまったて．．．。風邪をひいたら大変よ！！無鉄砲なんだから。何か羽織って行けばいいのに．．．」  
そう言って、杏樹は一生懸命智弘の背中を擦った。

「あゝ杏樹の体温は高くて温かいなあ．．．。ここに来て、一緒に過ごすうちに、1人で寝るのがとても虚しくて淋しい事を覚えてしまったよ。東京の暮らしは淋しいよ」

「私もね．．．。このベッドが広すぎて落ち着かなくて．．．それにやっぱり淋しいわ．．．。ここに越してきた時には、1人で自由気ままに清々するわって思っていたのに．．．」

「お．．．おいおい」

慌てふためく智弘を見て、杏樹はフツと笑った。

「今は1人は嫌いだよ」

「良かった。ちょっと焦ったよ。あゝ早く戻って来たいな．．．」

「私も！早く戻って来て欲しいわ」

「お互いに、今を乗りきって頑張ろう！！」

「ええ。忙しいのに戻って来てくれてありがとう。あなたの顔を見れたら勇気と元気が湧いて来たわ！！」

「俺も！！早く完全に戻って来れるように頑張るからね」

「ええ」

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

クリスマスの2日後。

こんな日にクリスマスのホームパーティーを開く人は少ないだろう。  
・・・

2人でキッチンに並んで、楽しくお喋りしながらクリスマスのご馳走の準備をした。

杏樹の作った、切り株型のクリスマスケーキブッシュ・ド・ノエル。切り株の木の質感は、杏樹の指導の元、智弘がフォークを利用してクリームに筋を付け、デコレーションした。

杏樹が器用にマジパンで作った、サンタクロースやトナカイの人形を飾って、プラスティックのモミの木のピックを刺して出来上がり！ケーキの前に2人で記念写真を写した。

それから薪ストーブでコトコトじっくり煮たビーフシチューと智弘の作った千切ったレタスが少し大きめのワイルドなグリーンサラダ。  
・・・

ビーフシチューには、サフランライスも添えた。それから智弘が準備したシャンパン。

外は一面真っ白な雪。そろそろ片付けようかなと思っていたクリスマスの電飾を、今日はライトアップした。

小さなガーデンハウスの煙突からは、ユラユラと白い煙が上っていた。

「2日後だなんて、かなり貴重なクリスマスパーティーだね」

「そうね・・・。あなたとここで過ごす初めてのクリスマス。本当はあれこれ思い描いて楽しみにしていたの。結局何のプレゼントの

準備もしてなくて、あげられるプレゼントがなくてごめんなさいね」

「そんな事気にするなって！来年まとめて貰うから」

「まあっ！」

テーブルにご馳走を並べて、店舗に飾ってあったポインセチアの鉢植えを持って来て、テーブルの上に飾り、クリスマスの雰囲気が出上がった。

「さ、お姫様。どうぞこの席にお座り下さい」

智弘が麗々しく椅子を引いて、杏樹をエスコートして席に座らせる。それから向いの席に、智弘も着席。

「まずはご馳走を食べる前に、お姫様にプレゼントがあるんだ」

「え？嬉しいわ……。準備してくれてたの？」

「うん。お姫様これをどうぞ……」

小さな木彫りの宝石箱を杏樹に手渡した。

「開けていい？」

「どうぞ！開けて！！」

中からは、小さな花のモチーフが横に5つ並んだ木彫りで紐は皮タイルのチョーカーネックレスが出てきた。

「高価なジュエリーじゃなくて申し訳ないんだけど……。本当は、手作りにしようと思って作りかけのものがあんだが、こんな状況で時間が無くなってしまったね。作ろうと思っていたデザインのを物を慌ててオーダーで作ったんだ」

「凄く素敵よ。この花は？」

「杏の花だよ。杏樹の名前からって、杏の花にしようと思ったんだ。杏の花ってどんな花かな？と思って調べてみたら、清楚でピンクの可愛い花で、杏樹のイメージにピッタリだって思ったよ」

「凄く嬉しい……。木彫りの花というのがいいわ。とても優しくて、ナチュラルな感じで……。本当に嬉しいわ」

「気に入って貰えて良かった！」

「私もねマフラーと手袋をプレゼントしようと思って編みかけのものがあるのだけれど……。とうとう完成出来なかったの。だからもうちょっと待っててね」

「うん。ずっと待ってるから……。楽しみにしてるよ」

「ありがとう」

「俺も、ありがとう」

2日遅れのクリスマスパーティ。

だけど2人で一緒に過ごす事が出来、とても幸せだった……。来年は絶対に、イブの日に出来ますように……。翌日、智弘は東京に戻って行った。

(第20話に続く)



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2293v/>

---

金色の陽と透き通った青空

2011年10月15日11時50分発行